志 摩 の 女
広田弦一

目次

志摩の若い男と女 1
東京の女 11
死 17
容疑者 27
言い争い 43
大勝負 54
事の終わり 65

志摩の若い男と女

１　志摩の若い男と女

神島という島が何処にあるか知らない人も多いだろうが、潮騒という小説のことは知ってる人も多いだろう。かの有名な小説家、三島由紀夫の作品だからだ。その小説では、歌島が舞台となってるが、その歌島が神島なのだ。神島は、鳥羽港の北東約１４キロの沖合に浮かぶ周囲約４キロの小さな島だ。

神島には、潮騒の中で描かれている八代神社、観的哨、燈台などが実在し、潮騒を読んだ後に神島を訪れると、まるで小説のシーンが思い浮かぶかのようだ。

それはともかく、その神島に、朝倉高志という二十歳の若者がいた。高志の父親の高行は、神島で漁師をしていて、また、高志は長男だったので、高志の将来は、自ずから高行の後を継いで、漁師になることが決まっていた。

朝倉家は、今、朝倉丸という５トンの魚船を所有していたが、購入してからまだ十年も経っていない。その為にまだ、ローンが残っていた。また、五十七歳という高行の年齢からしても、ローンは高志が受け継ぐことになるだろう。要するに、高志が高行の後を継いで漁師になることは、まるで重いものが上から下に落ちるように、必然的なものであった。

朝倉高志は、身長１７０センチ、体重６５キロの平均的な身体付きであったが、浅黒い肌に白い歯を持ち、素朴な容貌で、正に漁師という風体であった。

そんな高志は、鳥羽にある水産高校を卒業すると、親の後を継いで漁師になると、高志のことを知っている誰もかれもが思っていたのだが、その予想に反して、高志は何と東京の大学に進学した。しかも、漁師とは関係ない経済学部だ。

勿論、高志の両親は猛反対したし、また、漁師の仕事をするのに、経済を学ぶ必要はないと主張した。また、ローンの返済も早く終えたかったので、高行たちは高志に少しでも早く、漁に出てもらいたかったのだ。

また、高志の東京の大学進学に対して、猛反対した人物として記しておかなければならないもう一人の人物がいた。

それは、宮田恵子であった。

恵子は、高志の許婚であった。朝倉高行と、恵子の父親の宮田恵三の二人が、一方的に高志と恵子の結婚を決めてしまったのだ。

といっても、恵子は幼い頃から、高志のことが好きであった。それ故、その恵子の思いを父親の恵三は十分に知っていた。それだからこそ、高志と恵子の結婚は、親として当然のことだと思っていたのだ。

一方、高志の方は、恵子のことを特に好きではなかった。恵子の父親の恵三は、高志の父親の高行と同様、神島で漁師をしていたのが、恵子は海の男として生きて来た恵三の血を受け継いでか、気性も激しく、また、化粧、宝飾品といった若い女性が興味を抱くものには、無頓着だったのだ。また、その男のようなごつい容貌も、恵子の特徴だった。

そんな恵子のことを、ハンサムというものには全く縁がない高志といえども、余り好きにはなれなかった。しかし、高志にとって親の命令は、絶対的なものであり、決して抗がえないものであった。

そんな高志が、東京の大学に進学することを決意したのは、親の抑圧から逃がれたいという意識が働いていないといえば、嘘になるだろう。それ以外としても、神島という小さな島から離れ、もっと世の中を見てみたいという欲求が、高志の意思を動かしたのだ。いわば、高志は漁師という職業に就くことに向いてなかったのかもしれない。

そんな高志に、高行は大学卒業後、必ず神島に戻って来ては、漁師になると誓わせ、高志を東京に送り出したのだ。

高志が大学に進学して二年目の夏休みに、高志は郷里の神島に戻って来た。それは、高志が神島を後にして、一年四ヶ月振りのことであった。

一年四ヶ月振りといっても、中学生の修学旅行を終えての帰島を待ち受けるわけではなかったので、神島港の岸壁には高志の母親の花子の姿が見られるわけではなかった。

そのことを予め知っていたといえども、鳥羽と神島結んでいる定期船が港に着くと、高志の眼は自ずから岸壁に注がれた。

岸壁には二十人程の島民が定期船から降りて来る乗客を待ち受けていた。夫、妻、兄弟、友人なんかが、あるいは、恋人が降りて来るのを待ってるのかもしれない。あるいは、お客さんを待ち受けている観光業者もいるのかもしれない。

高志はといえば、花子といった家族の者がわざわざ高志を岸壁まで来ては待ってないことを知ってたので、知人の顔を探そうとはしなかったのだが、自ずから知人の姿を眼に捕らえてしまった。

それは、宮田恵子だった。高志の許婚の宮田恵子が、岸壁で定期船を待ち受けている人の中に混じっていたのだ。

そんな恵子を眼に留めた高志は、一体何故恵子が、神島港に来てるのかという疑問が高志の脳裏を捕らえた。というのも、恵子は高志が神島に戻って来るのを知らない筈だったからだ。高志は今回、神島に戻って来ることを恵子に知らせていなかったのだ。それ故、高志がこの定期船で戻って来ることを知ってる筈はないのだ。

ということは、恵子は高志以外の誰かを待っているのか？　そう思ったのだが、しかし、恵子がわざわざ神島港の岸壁まで来ては出迎えなければならないような人物がいるとも思えなかった。となると、やはり、恵子は高志を待っているのではないのか？

その高志の読みは、恵子と視線が合った時に正しいことが証明された。何故なら、恵子は高志と視線が合った時に破顔したからだ。

だが、高志はさっと恵子から視線を逸らした。そして、高志は恵子のことを眼にしなかったと言わんばかりの振りをした。

そんな高志は、乗船客たちの下船が始まると、ただ機械的に下船客たちの一人となって岸壁へと踏み出し歩き始めた。
すると、そんな高志に恵子が近付いて来ると、恵子は破顔しながら、
「高志さん。待っとったんや」
と、高志の顔を覗き込むかのようにしては言った。
すると、高志は薄らと笑みを浮かべながら、
「俺がこの船で戻って来ることを何で知っとったんや」
と、恵子を見やろうともせずに言った。
「そりゃ、あんたの母さんからや。それ以外に誰がおるんや」
と、恵子は当然だと言わんばかりに言った。
高志は、恵子と会うのは、一年四ヶ月振りであった。高志は上京して以来一度も恵子と顔を合わせたことはなかったのだ。
「母さんがあんたに知らせたのか？」
「そうや。今日の第三便で戻って来るとな。だから、こうやって迎えに来たんや」
と、恵子は嬉しそうな表情を浮かべては言った。
しかし、高志はそんな恵子を眼にして、
母親に、
<余計なことをやりやがって！>
と、心の中で罵りの言葉を浴びせた。
というのも、高志は元々、恵子のことをあまり好きではなかったのだが、東京での生活が慣れて来ると、ますます恵子のことを好きでなくなってしまったのだ。お世辞でも美人とはいえない男のような容貌に、ごつい身体付き。更に、男勝りの荒い性格。そんな恵子に、高志はもう一緒に時を過ごすのが堪らない位、嫌に感じるようになっていたのだ。
もっとも、幼馴染みの恵子のことは、小さい頃は好きであった。しかし、その思いを二十を過ぎた今となっても、持ち続けるとは限らないだろう。また、東京に出て派手な衣服やメイクをしている若い女性を眼にした高志は、女を見る眼が肥えてしまったのかもしれない。
それ故、高志が恵子のことを思わなくなったように、恵子も高志のことを思わなくなってくれないかなと思っていた。二人共、結婚に乗り気でなくなれば、高行も、また、恵子の父親の恵三も二人の結婚を無理強いすることは出来ないというものだからだ。
だが、今、眼にした恵子を見ると、恵子は相変わらず高志に惚れてるようだ。そう察知した高志は、渋面顔を浮かべざるを得なかった。
恵子の方をあまり見ようとはせず、また、恵子に話し掛けようとはしない高志に、恵子は、
「どこか、身体でも悪いんか？」
と、怪訝そうな表情を浮かべては言った。
「いや。そうやない」
と、高志は何ら表情を変えずに言った。
「そうか。それならええな。
で、いつまで島におるんや？」

「来月の終わり頃までや」
「そうか。だったら、明日、二人で会わんか」
　と、恵子は高志を見やっては、まるで媚を売るかのように言った。
　そんな恵子に、高志は、
「明日.....」
　と、眉を顰めた。
「ああ。明日や」
「明日といっても、何時頃や？」
「夜の八時頃がええんや」
「夜の八時？　　何でそんな遅い時間がええんや？」
「その時間が都合ええんや」
　そう恵子に言われ、高志は何も言おうとはしなかったが、そんな高志に、恵子は、
「都合悪いんか」
　と、眉を顰めた。
「そうやないけど」
「だったら、それで決まりや。
　で、場所は八代神社や。八代神社の境内で待っとってくれんか」
「八代神社の境内か。また、何でそんなところがええんや」
「何でって、そこがええんや。ただ、それだけや」
　と、恵子が言ったので、高志はそれ以上言おうとはせずに、
「分かったよ」
　高志がそう言うと、恵子は薄らと笑みを浮かべた。その笑みは、何だか<してやったり>と言わんばかりの笑みであった。
　そして、恵子は高志に、
「じゃ、明日」
　という声を掛け、神島港を背に高志の許を去って行った。
　そんな恵子の後ろ姿を高志はしばらく見やっていたが、やがて、神島港の方へと眼をやった。それは、久し振りに眼にした故郷の光景だった。殆どの島民の生活を支える小さな漁船が、あちこちに舫綱で繋がれ、それは、まるで日々の労働の疲れを癒しているかのようであった。また、港内のあちこちには、蛸壺や干からびた魚の肉片とか、乾いた魚の血がコンクリートにこびりついた痕などが見られ、正にそれらは、高志が久し振りに眼にした故郷の光景だった。

　高志は多くの島民が住んでいる住居の間を縫うように続いている石段を登りながら大きく息をついた。そして、やがて我が家に着いた。
　我が家に着くと、古びた玄関扉を開けた。そして、
「ただいま」
　と、大きな声で言った。
　すると、母親の花子が、

「おかえり」
　と言っては、高志を迎えた。
　そんな花子に、高志は、
「今、母ちゃん、一人か？」
「そうや。父ちゃんは漁に出てるし、花代は鳥羽の友達の家に行っとるが」
「そうか」
　と、高志は特に関心がなさそうに言った。高行が漁に出てることや、花代が鳥羽の友人宅に行ってることは、予め分かっていたことだからだ。
「今、蛸がよう捕れてな。人手不足で大変なんや。父ちゃんはお前がはよう戻ってこんかと、心待ちにしとるんや」
　と、花子は眉を顰めた。
　花子も高行と同じく、一刻も早く高志に神島に戻って来てもらって、高行と共に漁をすることを切望していたのだ。
　そんな花子の思いを改めて痛感した高志の表情は、自ずから曇った。高志は両親の意思に反して、大学卒業後、東京の会社で働きたかったからだ。
　とはいうものの、両親の意思を無視することは出来なかった。島で生まれ育ったものは、島の常識、慣習、掟とかいうものが重要であり、また、法律のようなものであったのだ。島の常識、慣習、掟とかいうものは、絶対に破ることの出来ないようなものが、高志たち島で生まれ育った者の中には、存在していたのだ。それを知っている高志の表情は、自ずから曇らざるを得なかったのだ。
　だが、その思いも、高志からすぐに吹き飛んでしまった。花子が、
「風呂に入るか」
　と言ったので、風呂に入ることにし、旅の疲れを癒すことにしたからだ。
　風呂から上がると、高志は花子に、
「恵子ちゃんが、港の岸壁で俺のことを待っとったんや」
　と、花子を見やっては言った。その言葉は、高志の口から自ずから発せられたかのようであった。
「そうか。そうやろな。恵子ちゃんは、お前が戻って来るのを、まだか、まだかと、心待ちにしとったからな。だから、一刻も早くお前に会いたかったんやろな」
　と言っては、花子は嬉しそうに笑みを浮かべた。
「何で恵子ちゃんは、俺が帰る船のことを知っとったんや」
　と、高志はその理由を知ってはいたが、怪訝そうな表情を浮かべた。
「そりゃ、私が恵子ちゃんに言ったからや。恵子ちゃんはわしに『いつ、高志ちゃんは戻って来るんや』と、訊いとったからな」
　と、花子は恵子に高志が帰って来る船のことを話したのは、当然のことだと言わんばかりに言った。
「ふーん」
　と、高志はそれを花子の口から耳にしても、特に表情の変化を見せなかった。
　そんな高志を眼にすると、花子は怪訝そうな表情を浮かべては、
「お前、恵子ちゃんが迎えに来てくれたのに、嬉しないんか」

「いや。そうやないけど」
　と、高志は笑顔を繕った。
　すると、花子は破顔し、
「そうやろな。恵子ちゃんは、お前の許婚やからな」
　と、満足げな表情を浮かべた。
「恵子ちゃんは、いつも俺のことを何か言っとるか」
「ああ。言っとるがな。結婚式はいつにするかとか、招待客は誰にするかとか、新居は何処にしようかとか、いつもそんなことを周りの者に言っとるそうや。
　それに、お前を恵三さんの船の船長にするつもりみたいや。恵三さんの船は、うちの船なんかより遥かに大きいから、お前はたいした出世になるやんか。それに、そうなれば、うちの船を誰かに貸し、船賃も手に入るぜ。そうなりゃ、不漁の時でも、生活に困らへんがな」
　と、花子は嬉しそうな表情で言った。
　そう言った花子の言葉に対して、高志は上の空であった。というのも、高志は明後日に東京から神島にやって来る花田香織のことが、高志の心の中を占めていたからだ。
　花田香織とは、新宿のバイト先で知り合った東京の女性で、髪を茶色に染め、すらっとした身体付きで、脚がとても綺麗な女性だった。性格も甚だ奔放的で、高志が今まで見たことのないような女性であった。
　また、そのように感じたのは、香織もだった。流行というものをまるで感じさせず、素朴で、まるでずっと昔にしか見られないような初心で、人を騙したりからかったりすることは出来ない男に見えたのだ。香織は今まで生きて来た中で、このようなタイプの男を見たことはなかった。正に珍しいものを観るかのように、高志のことを観るようになったのだ。
　そんな香織は、高志のことを少しからかい、また、少し遊んでやろうという悪戯心を起こし、アルバイトが終わった後、高志を誘惑したのだ。新宿の夜の居酒屋で一緒に酒を飲み、その後、ホテルに誘ったのだ。
　すると、高志は香織が思っていた通り、女の扱い方が下手であった。正に、高志は遊び慣れていなかったのだ。
　それが、既に何人もの男を経験している香織にとって新鮮だった。そして、そんな初心な高志と、今しばらく遊んでやろうと香織は思ったのだ。
　そして、今夏、高志が故郷の三重の神島に帰るということを聞き、香織も神島に行くから、そこで高志と会いましょうという約束を交わしたのであった。
　そして、そのことが香織の心を知らない高志を浮き立った思いへと駆り立て、花子の話も上の空となってしまったのだ。
　また、今の高志にとって、香織の存在がとても大きなものになってしまったので、嘗てのように、恵子のことを思わなくなってしまったのだ。それ故、恵子の話に耳を傾けることは、余り気乗りしなかったのだ。

　やがて、午後八時になった。高志は恵子との約束は忘れてはいなかったが、やはり、気

乗りしなかった。しかし、約束をすっぽかすわけにはいかなかったので、しぶしぶ夜の八代神社に向かった。
八代神社は、海の神「綿津見命」を祀る神社で、船乗りたちに、海の守護神として崇められていた。
　八代神社の境内は、薄暗いといえども、漆黒の闇というわけではなく、夜といえども、人の姿を確認出来ないことはなかった。
　そういった状況ではあったが、高志は約２３０段もの石段を上がり、境内に着いた頃は、はあはあと息をついていた。八代神社の境内に少し踏み出すと、すぐに恵子の姿を眼に留めた。すると、恵子がはっきりと笑みを浮かべたのを確認した。
　そんな恵子に、高志は、
「大分待ったんかい？」
　今は午後八時五分だが、高志が恵子の様を眼にすると、約束の八時よりもっと前に来たのではないかと思ったのだ。
「十分位かな」
「そうか。悪かったな」
　と、高志は言ったものの、その高志の声は素っ気なかった。そして、高志はすぐに恵子から眼を逸らせた。
　そんな高志に、恵子は、
「あたし、あんたの帰りを待ち侘びとったんや」
　と、高志に甘えるような表情と口調で言った。
「そうらしいな。母ちゃんから聞いたよ」
「そうか。で、母ちゃんは何と言っとたんや」
　恵子は興味有りげに言った。
「あんたが、俺との結婚式を何処でやるとか、招待客は誰にするかとか、新居を何処にするのか、そんなことを話しとったと言っとたな」
　と、高志が言うと、恵子は、
「そうか。母ちゃんはそう言っとたか。確かに、あたし、そのことばかり、考えとったんや」
　と、高志を見やっては言った。その恵子の表情は、とても嬉しそうだった。
　だが、高志の表情は、そんな恵子とは対称的であった。高志は眉を顰め、渋面顔を浮かべていた。高志は、少しも嬉しそうではなかった。
　そんな高志を見て、恵子は怪訝そうな表情
を浮かべては、
「あんた、嬉しないんか？」
　すると、高志は恵子から眼を逸らしたまま、
「そうやないけど」
　しかし、その言葉は、高志の本音ではなかった。今や、恵子との結婚は、高志にとって、全く望まないものになってしまっていた。東京に出て、都会的な派手な衣服で飾った綺麗な女性を眼にしてしまい、そのような女性と対称的な恵子に魅力を感じなくなってしまったのだ。

「だったら、何でそんな顔するんや？」
　恵子は再び怪訝そうな表情を浮かべては言った。
　すると、高志は慌てて笑顔を繕い、
「俺、何か変な顔しとるか」
　と、恵子を見やっては言った。
　確かに、その笑顔は高志の作り笑いであった。別に嬉しくもないのに、無理に笑顔を繕ったのだ。いくら恵子のことを思わなくなったといえども、高志は志摩で生まれ育った人間だ。恵子のことを無視し、機嫌を損なうことは出来なかったのだ。何故なら、恵子との結婚は、親が決めたことなのだ。親の命令は、絶対的なものであったのだ。それは、正に志摩の掟であるかのようであった。志摩の掟に抗うことは、志摩で生まれ育った者にとって、許されないことだと高志は理解していたのだ。
　恵子はそんな高志の笑顔を作り笑いとは受け取らずに、高志の心底からの笑顔と受け取った。
　そんな恵子に、躊躇いはなかった。
　恵子はこの時、恍惚な表情を浮かべては、眼を瞑った。そんな恵子は、高志に全てを捧げると言わんばかりであった。
　実際にも、恵子はこの一年四ヶ月という期間、ひたすら高志の帰省を待ち侘びていた。二十歳という女盛りにもかかわらず、男を受け入れることが出来ずに、欲求を抑えなければならない我慢に、恵子はもう限界に達していたのだが、その限界は、今夜払拭されるのだ。
　高志は眼を閉じ、高志に身体を寄り添って来た恵子を抱き締めた。だが、突如、恵子を突き放したのだ。
　すると、恵子は忽ち眼を開け、そして、怒ったような表情を浮かべては、
「どうしたんや？」
　と、些か刺々しい口調で言った。
「俺、今日はそんな気がせんのや」
　と、高志は決まり悪そうに言った。
「そんな気せんって、やりたいと違うんか」
　と、いかにも納得が出来ないような表情と口調で言った。
　高志も恵子も、それぞれ、恵子と高志が初めての女と男で、二人は高志が大学進学の為に上京する少し前に、鳥羽のホテルで結ばれた。そして、高志が戻って来るまでは、それぞれ決して浮気はしないと誓い合ったのだ。
　それ故、恵子は高志がこの一年四ヶ月の間、ずっと性欲を抑えていたと思っていたのだ。実際にも、恵子はずっと性欲を抑えていたのだ。それ故、高志もきっとそうだろうと信じて疑わなかったのだ。
　だが、高志はちゃっかりと恵子との約束を破ってしまったのだ。東京に出て、東京の刺激に触れてしまうと、恵子との約束など、すっかりと忘れてしまったのだ。
　恵子にそのように言われたので、高志は、
「それはそうやけど」
　と、決まり悪そうに言った。

「そうやったら、何でや？」
　と、恵子は再び納得が出来ないように言った。
　恵子にそうように言われたので、高志は、
「今日は何だか、気分が悪いんや」
　と、再び決まり悪そうに言った。
　そう高志が言うと、恵子は安堵したような表情を浮かべては、
「なんや。そうなんか。そうやったら、最初からそう言ったらええやんか」
　と、高志を見やっては言った。今の高志の言葉によって、恵子の求めを高志が何故拒んだのか、その理由を理解したからだ。
　高志はといえば、恵子に嘘をついたということに、若干後ろめたさを感じたものの、悔いはなかった。もはや高志にとって、恵子は過去の人物に成り下っていたのだ。この感情の変化はどうすることも出来なかった。
　高志の脳裏には、ただ高志の両親、恵子の両親に対して、どのように弁明すればよいのか、それしか恵子のことに関して考えることはなくなってしまったといっても、言い過ぎではなかった。
「で、あんたは、学校を卒業したら、志摩に戻って来るんやろ？」
　そう言った恵子は、些か心配そうであった。
「そのつもりやけど」
　そう言った高志の言葉を聞いて、恵子の顔は嬉しそうなものへと変貌した。
「それを聞いて安心した。あたし、あんたが東京に出て、東京が気に入ってしまい、志摩に戻って来んようになるんとちゃうかと、気にしとったんや。しかし、それは、あたしの要らぬ心配やったんや。
　で、志摩に戻ったら、あたしの父ちゃんの船に乗ってくれるかな」
　と、いかにも真剣な表情を浮かべては言った。
　その恵子の表情、そして、言葉を聞いて、高志は「そんな気はもうない」とは言い難かった。
　それで、思わず、
「ああ」
　と、言ってしまった。
「そう……。それを聞いて、あたし、またも安心したよ。ああ、よかった。
　で、また会いたいんや」
「いつがええんや？」
「明日の夜がええな」
　と、恵子は高志に媚を売るかのように言った。
「明日の夜か。明日の夜は駄目や」
　と、高志は決まり悪そうに言った。何故なら、明日は東京から、花田香織がやって来るからだ。即ち、高志は明日は香織とずっと一緒に過ごすつもりだったのだ。それ故、恵子と会ってる時間など、なかったのだ。
「何で駄目なんや？」
　と、恵子は眉を顰めた。

「まだ、気分が悪いかもしれんからや」
「そう……。だったら、明後日の夜は？」
「明後日の夜か。それなら、ええわ」
　高志は、香織は明後日の昼頃、志摩を後にすることになっていたので、そう言ったのだ。
　すると、恵子は嬉しそうな笑みを浮かべては、
「じゃ、それで決まりや。明後日の夜が待ち遠しいな。じゃ、今日はこれで帰ることにするか」
「ああ」
　これによって、二人は八代神社を後にすることになったのだ。
　八代神社を後にし、二人は我が家に向かったのだが、その時、恵子は高志に何だかんだと、高志が島を後にしていた時に起こった出来事、例えば安田さん夫婦に長男が生まれたとか、遠い親戚の奥さんが癌で亡くなったとか、高志にとって特に何でもないような他愛無い話を何だかんだと聞かせた。そんな恵子の話に高志は何ら表情を変えずに「そうか」とか「なるほど」とかいった言葉を発していた。そして、我が家近くで別れた頃には、恵子の言ったことなど、殆ど思い出すこともなくなっていた……。

東京の女

二章　東京の女

<早く二時三十分ならないかな>

と、高志はそればかり思っていた。鳥羽発神島行きの定期船第三便に乗って花田香織は神島に来ることになっていたからだ。

香織が神島に来るのは、無論、高志の郷里の神島を見に来る為だ。また、高志と会うという目的もあるだろう。

文学というものに、まるで縁のなかった香織には、神島が三島由紀夫の潮騒という有名な小説の舞台になっている島だということは、全く知らなかった。それ故、神島のことをただ高志の郷里だということ以外に知らなかったのだ。

間もなく、二時三十分になろうとしていた。高志がその時、神島港から鳥羽の方に眼をやると、定期船は後少しで神島に着くということを確認出来た。

程なく定期船は、神島港の浮桟橋に接岸した。

浮桟橋に接岸すると、乗客が一人、また、一人と、定期船から浮桟橋へと降り立った。その多くの者は島民だと思われたが、中にはリュックサックを背負った観光客らしき姿もちらほら見られた。

花田香織はまだかまだかと、高志は眼をきょろきょろさせ、下船客を一人、一人チェックしていたのだが、高志の表情は、突如、綻んだ。やっと、香織の姿を眼に捕らえたからだ。香織は定期船から降り始めた乗船客のうち、二十番目位であった。

高志が香織に近付いて行くと、香織も高志の姿を素早く眼に留めた。すると、香織の表情も、一気に綻んだ。

香織は高志に近付いて行くと、

「待った？」

と、弾んだ声で言った。

「いや。殆ど待たなかったよ。船は時間通りだったからね」

と、高志は東京で覚えた標準語で言った。

「そう。それはよかった」

と言っては、香織は辺りを見回した。

それは香織にとって正に素朴な風景であった。蛸壺とか小さな漁船、そして、綺麗な海。

それらは、正に香織が高志と初めて接した時に感じたように、香織にとってとても新鮮だった。

また、香織の服装も新鮮であった。髪を茶色に染め、紫色のシャツにブルーのホットパンツをはき、赤いブランド物のバックを持っていた。また、耳たぶには、大きな金色のピアスをつけていた。このような女性は、神島周辺では眼にしたことはなかった。

香織はしばらく辺りの風景に眼をやったのだが、そんな香織に潮の臭いが鼻をついた。それも、香織にとって新鮮だった。

そして、香織と高志はやがて、神島港を後にし、島にある唯一の旅館である大崎荘に向かった。大崎荘は、港から徒歩五分程の高台に建てられた見晴らしが自慢の旅館であった。

二人の後姿は、他人が見れば恋人のように見えたかもしれない。そして、そんな二人のことを訝しげな眼差しで見入っていた女性がいた。

それは、恵子の母親の宮田春子であった。春子は神島港にある漁協で、捕れた魚の仕分けなどの仕事をしていたのだが、漁協の中からふと港の方に眼をやったところ、一目で観光客と分かる派手な女性と愉しそうに語り合っている高志の姿を眼に留めたのだ。

この時、春子の脳裏にぴんと来たことがあった。

それは、女だ。

春子は恵子から、高志が恵子と一年四ヶ月振りに再会したにもかかわらず、余り嬉しそうにしてなかったという話を聞かされていた。そして、その時、高志は気分が良くないと恵子に言ったことも聞かされていた。つまり、高志が恵子にそのような素振りを見せたのは、高志の体調が良くなかった為だと、春子も理解していたのだ。

しかし、それは嘘だと、春子は察知したのだ。

つまり、高志は東京に出てから、今、春子が眼にした派手な女性と仲良くなり、恵子のことを思わなくなったのだとぴんと来たのだ。

そんな春子が、渋面顔を浮かべては、二人の後姿を見入っていたことなど、全く知らないその若い二人に対して、一層渋面顔を浮かべては見入り続けたのであった。

大崎荘で少し寛いだ後、香織は高志の案内の下に、島の主だった見所に足を運んでみることにした。といっても、島自体はとても小さい為に、また、見所もそれ程多くない為に、半日もあれば十分に回れるということを香織は事前に高志から説明を受けていた。

大崎荘を後にすると、まず八代神社、神島燈台、そして、観的哨という具合に、二人は足を運んだ。

七月という季節柄、観的哨に着いた頃には、二人はもう汗だくであった。

とはいっても、観的哨の中に入れば、そこは太陽の光線を遮り、一時の涼を二人に与えることが出来た。もっとも、一度シャツに染み付いた汗は、簡単には乾きはしない。

そんな具合であったが、高志は、

「香織ちゃんは、三島由紀夫という小説家を知ってるかい？」

と、ハンカチで額の汗を拭いながら訊いた。

「名前位は知ってるよ」

「じゃ、三島由紀夫の潮騒という小説を読んだことはあるかい？」

「それは、ないね」

と、香織はそれは当然と言わんばかりの表情と口調で言った。
「じゃ、山口百恵と三浦友和が主演した潮騒という映画を見たことはないかい？」
「それもないよ」
と、香織は山口百恵と三浦友和という名前すら知らないと言わんばかりに言った。
「そうかい。で、その小説とか映画は、この神島が舞台になってるんだが、この観的哨の場面が大きな山場となってるんだよ。
主人公の新治という島の若い男が、この観的哨の中で薪に火をつけたまま眠ってしまうんだが、後でやって来た初江が雨に濡れた肌着を脱いでは乾かそうとするんだよ。
で、初江は裸になった自分を見ては駄目だと新治に言うんだが、新治はそんな初江の言葉に従わずに見てしまうんだよ。
そして、初江を抱こうとしたんだが、初江は結婚するまでは駄目だと、頑なに性交を拒んだんだよ」
と、高志は潮騒で描かれている観的哨の場面を香織に説明した。高志は子供の頃、この潮騒という小説を愛読していて、そのストーリーをすっかりと覚えていたのだ。
その高志の説明を聞いて香織は、
「今の説明で、その場面が思い浮かぶようだわ。
でも、その小説で描かれている女性は随分と堅物なのね。今の時代、結婚するまで処女を守り通そうとする娘は、天然記念物みたいだわ」
と、眼を大きく見開いてはおどけたような表情を見せては言った。
すると、高志は思わず顔を赤らめては、
「そうだな」
と、香織に相槌を打った。そして、幾分か恥ずかしさを感じた。
というのも、高志は実は、東京に出るまでは、女性というものは、潮騒で描かれている初江のように、結婚するまでは処女を守り通すのが普通ではないかと思っていたのだ。島で生まれ育ち、一般的な常識というものに疎かった為に、そのように思っていたのだ。それ故、今の香織の言葉を聞いて、幾分か気恥ずかしさを感じたのである。
「で、あたしたちは今、その新治と初江になったみたいね」
「というと？」
「だって、その二人、愛し合っていたんじゃないの。それと、初江の肌着が濡れていたということ。もっとも、初江は雨に濡れたのだけど、あたしの場合は汗によって濡れたという違いはあるけど。
でも、肌着を脱いで身体を乾かすというのは、同じじゃないかな。
もっとも、薪はないけど、太陽の光線があたしの肌着を乾かしてくれるわ」
と言うと、香織は何ら躊躇うことなく、紫色のシャツを脱いでしまった。すると、香織の身体には、白いブラジャーが眩しげに輝いていた。
香織は脱いだシャツを太陽の光線に照らされている窓側に置いた。つまり、汗に染み付いてしまったシャツを太陽の光線で乾かそうとしたのだ。
そんな香織を見て、高志は些か気恥ずかしさを感じた。ここは、大崎荘の中ではない。いつ、誰が来るのか分からない場所なのだ。
それで、高志は、

「そんな姿になっていいのかい？　誰かが来たらどうするんだよ」
　と、些か顔を赤らめては言った。
　すると、香織はあっけらかんとした顔で、
「この辺りはまるで人気はないよ。だから、誰も来やしないよ。
　それに、来たっていいじゃないの。別に悪いことをしてるわけでもないし」
　と、高志の心配など意に介さないと言わんばかりに言った。
　香織はそう言ったものの、高志はやはり、人目が気になった。
　そんな高志に、香織は、
「ねぇ。あたしの背中をこれで拭いてくれないかしら」
　と、高志に背を向けては、赤いハンカチを高志に渡した。
「いいのかい？」
　高志は殊勝な表情を浮かべては言った。
「構わないよ。背中まで手を伸ばすことは出来ないもん。それに、背中が汗で濡れて、気持ち悪いのよ」
　そう言われたので、高志は香織から手渡されたハンカチで、香織の背中を拭き始めた。
　しかし、高志は香織のハンカチで香織の背中を拭きながら、にやにやとした笑みを浮かべていた。
　香織を高志が初めて抱いたのは、ほんの二ヶ月前だったが、その時は、じっくりと香織の背中を眼にする機会はなかった。それが、今、改めて眼にすると、それは、まるで光輝く宝石のように見えたのだ。その緩やかな曲線を描く背とくびれ。そして、滑らかな肌触り。
　それは、まるでこの世にこんないい女がいるのかという思いを高志に抱かせた。また、世の中には、こんなに男心を擽るものがあるのかと痛感した位であった。
　そんな高志に、香織は、
「じゃ、今度はこっちを拭いてよ」
　と言っては、向きを変えた。即ち、香織は高志と向かい合わせになったのだ。
　そんな香織には、白いブラジャーがとても似合っていた。
　だが、香織は高志がそのように思う時間を奪うかのように、
「早く拭いてよ」
　と、高志を急かした。
「いいのかい？」
　高志は再び殊勝な表情で言った。
「いいに決まってるじゃない。本人が頼んでるんだから」
　と、香織は悪戯っぽい笑みを浮かべた。
　それで、高志はゆっくりと、また、丁寧に香織の肩の辺りから徐々に身体を拭き始めた。そして、徐々に胸の辺りにまでハンカチを移動させた。
　しかし、まさか、乳房まで拭くわけにはいかないので、乳房を避けようとすると、香織は、
「ブラジャーを外してよ」
　と、澄ました表情で言った。

そう香織に言われ、高志はまるでご主人から命令を受けた下僕であるかのように、香織のブラジャーを外した。
ブラジャーが外れると、そこはまるで花が咲いたかのようにピンク色の乳首を持った形の良い香織の乳房が待ってましたと言わんばかりに高志の眼に飛び込んで来た。それは、正に香織の自慢の乳房であった。
高志は、思わず香織の乳房に見惚れてしまった。
香織はそんな高志を眼にして、満足そうな笑みを浮かべた。それは、まるで高志を自分の思い通りに動かせるという確信を得たかのようであった。
そんな香織の乳房を見惚れ続けるだけの高志に、
「ねぇ、早くおっぱいを拭いてよ」
と、高志に甘えるかのように言った。
そんな香織に、高志が異議を唱える筈はない。
高志は、
「ああ」
と肯くと、まるで魚が餌に飛びつくかのように、香織の乳房に手を伸ばしたのだった。

丁度その頃、恵子は既に母親の春子から二人のことを耳にし、今、観的哨の近くにいた。即ち、高志はその派手な女性を大崎荘を出発点にしては、島の見所を案内し、やがて、観的哨に来るのではないかと閃いたのだ。
そして、その恵子の閃きは当たった。大崎荘近くの物陰でじっと身を潜め、大崎荘のエントランスを窺っていた恵子は、三時頃、昨夜恵子には決して見せなかったような嬉しそうな表情を浮かべている高志が、まるでファッション誌にでも載ってそうな綺麗な女性を連れては大崎荘から出て来ては、八代神社の方に向かったのだ。そして、二人は後で観的哨に来ると、恵子は閃いたというわけだ。
そして、その閃きは当たった。大崎荘を後にして四十分程した後、二人は観的哨にやって来たのだ。観的哨近くの木陰で二十分も身を潜めていたことは、恵子にとって決して無駄ではなかったというわけだ。
そんな恵子は、今、二人の前に現れてやってもいいのだが、それはあまりにも浅墓だと思い、踏み止まった。
だが、十五分経っても、観的哨の中から二人は出て来ないので、恵子はどうしても中で何をしてるのか、確かめたいという衝動を抑えることは出来なかった。
それで、観的哨にそっと近付き、そして、窓ガラスのない大きな窓からそっと覗いてみたところ、何と、恵子は恵子の想像だにしてなかった場面を眼にしてしまったのだ。何と高志が上半身裸の女の乳房に手を置き、女は「キャーキャー」と嬌声を上げていたのだ。
その場面は、正に恵子に激しい衝撃を与えた。恵子はとてもそれを正視してることは出来なかった。
それで、恵子は後退りし、そして、小走りで観的哨から遠ざかって行ったのであった。
恵子はやがて八代神社の近くまで来ると、自ずから昨夜、何故高志が恵子に冷たかったのか、理解した。即ち、高志には女が出来たのだ。

恵子から離れ東京で暮らしている内に、女、即ち、今、高志と共に観的哨にいた女が出来たのだ。だから、高志は恵子に白々しい態度を見せたのだ。

そう思うと、恵子の眼には怒りの炎が激しく燃え上がった。そして、唇を強く噛み締めた。

また、あの女じゃ勝てないとも思った。

つまり、恵子よりもあの女の方が遥かにいい女だったのだ。あんな女と仲良くなれば、高志は恵子のことを疎んじるようになってしまうことを恵子は理解出来ないわけでもなかった。

だが、恵子は高志と結婚することを決めていたし、また、周囲の者にもそのように話していた。また、八代神社にも、何度も高志と恵子に幸いあれと祈念して来たのだ。

そんな恵子のことを高志が裏切ったことは、到底許すことは出来なかった。

死

三章　死

「おかしいな」

　と、大崎荘の前で首を傾げたのは、朝倉高志であった。大崎荘の前で午前十時に香織と待ち合わせをしていたのに、まだ香織は姿を見せないのだ。今はもう午前十時十五分なのだ。

　香織という人間は甚だ奔放なのだが、約束の時間をすっぽかしたことは今まで一度もなかった。それなのに、約束の時間を十五分も過ぎているのに、まだ現われないとなれば、高志が首を傾げるのは、もっともなことであろう。

　そりゃ、ここが東京というのなら、分からないわけではない。いつ何処で事件とか事故が起こり、電車が動かなくなったりすることが往々にしてあるからだ。

　しかし、ここは東京ではない。神島なのだ。香織の行動を妨げるものは、何もない筈なのだ。

　となると、朝寝坊でもしたのだろうか？

　昨日、観的哨で衝撃的な一時を過ごし、香織の肩を抱き抱えるようにして、香織を大崎荘まで送った高志は、そのような高志を知人に見られやしないかと、冷や冷やしていたのだが、香織にそうしてくれと言われれば、断る術はなかった。

　また、高志としても、ここが神島でなければ、喜んで引き受けたであろう行為なので、内心では冷や冷やしていたものの、決して悪い気はしなかった。

　そして、香織を大崎荘まで送って行くと、香織が「明日の午前十時に大崎荘の前で待っててね」と言ったので、高志はその通りにしていたのだが、香織は依然として姿を見せなかったというわけだ。

　十時二十分になると、流石に痺れを切らしてしまった。香織の部屋は何号室なのか分かっていたので、この時間まで待てば、部屋に行くのも仕方ないだろう。

　高志はそう思うと、三階まで階段で上がっては、３０３号室に向かった。香織の部屋は３０３号室であったからだ。

　３０３号室の前まで来ると、高志は妙な光景を眼にしてしまった。というのは、大崎荘の係員らしき男が香織の部屋、即ち、３０３号室をノックしていたからだ。

　香織が部屋にいるのなら、当然香織は扉を開けるに違いない。

　高志はそう思ったのだが、扉はなかなか開きそうもない。

　すると、男は諦めたのか、３０３号室を後にしようとした。

　そして、高志の傍らを通り過ぎようとしたのだが、それを高志が呼び止めた。

「すいません」
　高志の声に、その従業員、即ち、田中（ ５５ ）は振り返り、高志を見やった。
　そんな田中に、高志は、
「３０３号室の方は、まだ眠ってますかね？」
　すると、田中は怪訝そうな眼差しを高志に向けた。そんな田中は、高志の身元を問うてるようであった。
　そう察知した高志は、
「僕は３０３号室に泊まっている花田香織さんの友人で、午前十時にこの大崎荘の前で待ち合わせをしていたんや。しかし、花田さんは、まだ姿を見せないんや。それで、どうしたものかと思い、３０３号室まで来たんや」
　と、困惑したような表情と声で言った。
　すると、田中は、
「実は３０３号室の花田さんがチェックアウトの時間を過ぎたにもかかわらず、まだチェックアウトをなされないので、部屋にまで来てはノックしたのですが、応答はなかったというわけですよ」
　と、渋面顔で言った。
「朝食は食べたのかな？」
「いや。お食べになりませんでした。ご気分でも悪いのかと思い、そのままにしておいたのですが...」
　と、田中は決まり悪そうに言った。
「そうですか。では、花田さんは、まだ部屋の中で眠ってるのかな？」
「さあ.....、そこまでは分からないですね」
「この大崎荘のチェックアウトの時間は何時なんや？」
「午前十時です」
「午前十時か。それは、おかしいな」
　と言っては、高志は首を傾げた。いくら旅の疲れがあるといえども、香織は子供ではないのだ。今の時間になっても、まだ部屋の中で眠ってるというのは甚だ妙だといわざるを得ない。
　それで、高志は、
「僕が立会人になりますから、部屋を開けてみてはどうですか」
　と、田中を見やっては言った。
　高志は、まだ眠っている香織を起こそうと思い、そう言ったのではない。高志は何となく不審な思いを抱いたのだ。
「そうしましょうか」
　高志にそう言われたので、田中は鍵を取り出し、早速３０３号室の扉を開けた。そして、
「失礼します」
　と言っては、中に入った。そして、その後に、高志が続いた。
　だが、そこには、思ってもみなかった光景があった。何故なら、香織は部屋の中にいなかったからだ。これには、高志だけでなく、田中も驚いてしまった。

田中は念の為にユニットバスをノックしては開けてみた。しかし、香織はいなかった。
部屋の中に荷物があるのだから、香織は未だチェックアウトしていないことは確実だ。しかし、部屋にいないとなれば、外出してるとしか言いようがない。
それで、高志は、
「花田さんはチェックアウトの時間を忘れて何処かに行ってしまったのかな？」
高志がそう言うと、田中は、
「それならいいのですが」
と、渋面顔で言った。
「まさか、事故に遭ったりはしてないやろな？」
高志は心配げに言った。
すると、田中は、
「僕もそれを心配してるのですよ。何処か危険な場所に行ってしまい、事故に遭ってしまったのではないかと。島には危険な岩場なんかがありますからね。
以前、うちのお客さんで、岩場で怪我をしては動けなくなってしまった若い女性がおられましてね。その二の舞を踏んでしまったのではないかと、僕は心配してるのですよ。
また、岩から足を踏み外してしまい、海に落ちてしまったという可能性もありますよ」
と、些か表情を強張らせた。
確かに、田中の言った通りだった。神島で生まれ育った高志は、この島に危険な場所があることを知っていた。そして、好奇心旺盛な香織なら、そういった場所に近付き、事故に遭ってしまった可能性は、充分にある。今の時間になっても、部屋にいないということから、その可能性は大いに有り得るだろう。
そう思うと、高志は一層渋面顔を浮かべざるを得なかった。
そんな高志を見て、田中は笑みを浮かべては、
「まあ、滅多なことは起こりませんよ。それ故、もう少し待ってみましょうよ」
と、高志に言ったのだが、その時、田中とは違う大崎荘の者らしき男が蒼い顔を浮かべては、二人に早足で近付いて来ては、引き攣った表情で、
「大変なことになってしまいましたよ」
と、上擦った声で言った。
「それは、どういうことなんだ？」
田中は緊張したような表情と声で言った。
「先程、古里の浜で若い女性の死体が見付かったのですよ。その若い女性は、うちのお客さんかもしれないのですよ」
それを聞いて、田中は無論、高志の表情も、さっと青褪めた。やはり、田中たちが恐れていたことが、現実となってしまったみたいだからだ。
しかし、高志はそれが事実として認めることは出来なかったので、
「僕がその女性が花田さんなのかどうか、確認しますよ。僕は花田さんの友人なので」
と、力強く言った。
「そうですか。じゃ、そうしてもらえますか」
と、まだその女性の身許が確認されていないことを知っているその男は、そう言っては、高志を古里の浜へと案内することになった。

十五分位で古里の浜に着くと、既に五人程の人が姿を見せていた。
その女性は既に担架に載せられ、毛布が被せられていた。その周りを島の人間らしき男たちが囲んでいた。
田中が、
「女性の身許に心当たりある人がいるみたいですよ」
と、言った。
すると、その者たちは、一斉に高志を見やった。
そして、高志が女性の傍らにまで来ると、一人の者が毛布を捲り、女性の顔を高志に見せた。
それは、正に香織であった。昨日あれ程元気だった香織が、そこにいた。
それは、正に信じられない光景だった。正に高志は脳天をハンマーで殴られたかのような激しい衝撃を受けた。そして、言葉を発することは出来ずに、呆然と立ちすくんだ。
そんな高志を眼にして、田中は、
「やはり、花田さんのようですね」
と、殊勝な表情で言った。
すると、高志は厳しい表情を浮かべては、黙って肯いた。
すると、田中も厳しい表情で黙って肯いた。
やがて、香織は島の者たちによって港へと運ばれて行った。そして、鳥羽市内の病院で司法解剖が行なわれることになったのだ。
そして、高志はやがて、高志の前に姿を見せたその警官、即ち、横山治雄警部補（４０）から、
「少し話を聴かせてもらいたいんや」
と言われたので、高志は唇を噛み締めては黙って肯いた。
そして、高志は古里の浜の手頃な岩の上に腰を降ろしては、横山と話をすることになった。
「で、あなたは、あの女性のことを知ってるとか」
と、ごつい身体付きの横山は、好奇心を露わにしては言った。
「ああ。知っとる」
と、高志が言うと、横山は眉を顰め、
「あなたは、島の人かな？」
「そうです。僕は神島出身の朝倉と言います」
と、高志は言った。
「そうかい。それなら、話し易い。
で、朝倉さんは、あの女性を知っとるのかな？」
「ええ。花田香織さんといいました」
と、高志は伏目がちに言った。
「花田香織さんか。朝倉さんは、花田さんとはどういった関係なのかな？」
横山は高志をまじまじと見やっては興味有りげに言った。
「友人ですよ。といっても、僕は今、東京の大学に行っとるが、花田さんとは、バイト先で知り合ったんや。

で、僕がこの神島に帰省すると言ったところ、花田さんは、神島に行ってみたいと言ったので、昨日の午後二時半頃、神島に着いたんや。ただし、一人で来たんや。

で、僕はそんな花田さんを港で迎え、花田さんに島の見所、つまり、八代神社とか燈台、観的哨なんかを案内し、午後五時頃、花田さんの宿泊先である大崎荘で別れたんや。

そして、花田さんは、今日の第三便で神島を後にすることになっていて、僕は今日の午前十時頃、花田さんと大崎荘の前で会うことになっとったが、十時二十分頃になっても、花田さんは姿を現わさんだ。

それで、僕は花田さんの部屋まで行ったが、すると、宿の人がいて、花田さんはチェックアウトの時間になっても、チェックアウトなされないというので、僕が立会人となり、部屋の中に入ってみたんや。すると、荷物はあったものの、花田さんは部屋の中にいなかったんや。

それで、どうしたものかと思っていたが、古里の浜で女性の死体が見付かったという知らせが入ったので、急遽古里の浜に行ってみたところ、その女性の遺体は花田さんやった...」

と、高志は無念そうな表情で言った。

すると、横山は、

「状況は大体分かったよ。

で、花田さんは後頭部に裂傷があってな。司法解剖がまだ行なわれたわけではないので、何故死んだのかはっきりしたことは分からんが、花田さんが亡くなられたことには間違いないんや。

で、朝倉さんは、花田さんが何故死んだのか、心当たりないかな？」

と、高志の顔をまじまじと見やっては言った。

「それが、まるでないんや。昨日の花田さんを見てると、まさか今日、死体で見付かるなんて、とても想像できんだ。僕はまだ花田さんが、死んだということを現実として受け止められないんや。だから、何故死んだのかなんてことは、てんで分からんな」

と、高志はいかにも無念そうに言った。

すると、横山は、

「そうか」

と、渋面顔で言った。花田香織の死に関して、最も情報を持ってそうな朝倉高志が分からないとなれば、捜査は長引くのではないかと思ったからだ。

そんな横山に、高志は、

「花田さんの死因はどういったものなんや？」

と、眼をぎらぎらと輝かせては言った。

「だから、先程も言ったように、司法解剖してみないことには、はっきりとしたことはいえないんや」

と、横山は渋面顔で言った。

「僕は事故死だと思います。花田さんは、好奇心の強い女性やったから、大崎荘からそれ程離れていない古里の浜まで行き、足を滑らせてしまったりして頭を岩にぶちつけてしまったのではないかな？　　衣服が海水に浸かってなかったことから、その可能性は、充分にあると思うな」

と、高志は正にそれしか考えられないと言わんばかりに言った。
「そうかもしれないな。しかし、司法解剖してみないと、何とも言えないよ。
で、朝倉さんの連絡先を教えてもらいたいんや。後で何かと訊かなければならないことがあると思うからな。それと、花田さんの連絡先も知りたいな」

香織の遺体は鳥羽市内のＳ病院に運ばれ、直ちに司法解剖が行なわれた。
すると、死亡推定時刻と死因が明らかになった。
死亡推定時刻は、昨日、つまり、七月二十二日の午後六時から七時頃で、死因は後頭部を鈍器などで殴られたことによる脳挫傷であることが分かった。明らかに殺しだ。
その結果を受けて、鳥羽署に捜査本部が設けられ、鳥羽署の米川勝司警部（５４）が捜査を担当することになった。
そして、米川はまず高志に会っては、香織の死亡推定時刻と、また、殺しによる死であったことを説明した。
すると、高志は、
「そんな.....」
と、引き攣った表情で言った。そんな高志は、正に香織の死が殺しによってもたらされたということは、信じられないと言わんばかりであった。
「で、殺しと決まったからには、我々が捜査することになったが、朝倉さんは、花田さんを殺したような人物に心当たりないかな？」
と、米川は高志の顔をまじまじと見やっては言った。
「それが、まるでないんや」
と、高志は渋面顔で言った。
「ふむ。で、朝倉さんは、花田さんと知り合って、どれ位になるのかな？」
「半年位や」
「半年か。で、朝倉さんは、花田さんと同棲していたのかな？」
「いや。そのようなことは、全くなかったよ」
「ということは、アルバイト先で、顔を合わせていた位なものかな？」
「まあ、そんな感じや」
「アルバイトで、週に何回位、顔を合わせていたのかな？」
「大体、三日位かな」
「ということは、朝倉さんは、花田さんとは特に親密ではなかったのかな？」
「そうですよ」
それを聞いて、米川は決まり悪そうな表情を浮かべた。というのも、その程度の間柄では、朝倉高志からさほど、情報は入手出来ないと思ったからだ。
とはいうものの、高志のことは一応疑ってみる必要はあると思った。高志はいかにも香織の死を嘆き哀しんでいる素振りを見せてはいるが、それは演技であって、高志と香織との間で何らかのトラブルが発生し、高志が香織を殺したという可能性がないとは言い切れないであろう。何しろ、神島では香織は高志以外に知り合いはいないだろうから。
そう思ったものの、この辺で米川は高志に捜査協力の礼を言い、高志の許を後にした。

神島で若い女性の他殺体が発見されたという事件は、忽ち神島内で拡がった。何しろ、周囲４キロにも満たない小さな島で、このような凶悪事件が起こったということは、前例のないことであった。それ故、香織の事件は疾風の如く島内に知れ渡ったのだ。そして、今や島内では、香織の事件で話題が尽きないという程であった。

そうなって来ると、いくら島の人口が少ないといえども、香織の事件に関して情報が入って来た。香織と思われる女性が、一昨日の午後二時半着の定期船で島に着き、岸壁で待っていた若い男と共に港を後にしたことや、一昨日の午後五時頃、香織と思われる女性が、大崎荘の近くで若い男と話をしていたのを眼にしたという具合に。

しかし、この二つの情報は、捜査に役立つものではなかった。何故なら、この二つの出来事は、既に朝倉高志から聞いていたからだ。即ち、このいずれも香織と共にいた男は朝倉高志であっただろうからだ。

しかし、大崎荘に泊まっていたという神奈川県からやって来た葛城五郎という若い男の話は捜査に役立つものとなった。葛城は、

―一昨日の午後四時頃、僕は監的哨に行き中に入ろうとしたのですが、妙な場面を眼にしてしまったのですよ。

と、米川に興奮気味に言った。

「妙な場面ですか。それはどういったものですかね？」

米川は興味有りげに言った。

―僕は監的哨の中に入ろうと思い、監的哨に近付いて行ったのですが、その時、若い女性が身を屈めては、そっと監的哨の中を覗き見していたのですよ。

その様を見て、思わず僕は動きを止め、木陰に身を隠しては女性の様を窺うようにしました。というのは、何となく僕がその女性に近付くのは悪いことではないかと思ったからです。

つまり、その女性は監的哨の中を覗き見してて、そうしてることを監的哨の中にいる人に知られたくなかったみたいなのですよ。それで、僕はその覗き見してる女性に気を配ったというわけですよ。

で、僕がその女性の様子を窺っていたのは、二、三分位の間でしたが、やがて、その女性は僕の近くを小走りで通り過ぎて行きました。

その女性は、何だか泣いているようでしたね。何故なら、目頭に手を当てては、哀しそうな表情をしてましたからね。

と、葛城は眼を大きく見開いては、些か興奮気味に言った。

「なるほど。で、葛城さんは、そのことが事件に関係あると思っておられるのですかね？」

と、米川は興味有りげな表情を見せては言った。

すると葛城は眉を顰めては、

―まあ、最後まで話を聞いてくださいよ。

僕はその女性が去って行った後、監的哨に行っては、その女性のように、中を覗き見してみたのですよ。すると、どうなっていたと思いますかね？

葛城は思わせぶりの言い方をした。

「そりゃ、分からないですよ」
　と、米川は些か顔を赤らめては言った。
　すると、葛城は小さく肯いては、そして、
―実はですね。男女が、監的哨の中で抱き合っていたのですよ。それで、僕は見てはいけないものを見てしまったと思い、顔を赤くさせてしまったのですよ。
　で、そのことと事件の関係ですがね。
　実は、抱き合っていた男女の内、女の方が古里の浜で死体で見付かった女性に似ているのですよ。その女性は髪を茶色に染めた綺麗な女性だったので、その顔を今でも覚えている位ですからね。
　と、葛城は眼を大きく見開いたまま、再び些か興奮気味に言った。
　その葛城の話を耳にすると、米川は唇を噛み締め、厳しい表情を見せた。確かに、葛城がもたらした情報は、甚だ興味深いものだったからだ。
　そんな米川に、葛城は、
―でも、何故その女性はその二人を見て、哀しそうな表情を浮かべ、泣いてしまったのでしょうかね？
　すると、米川は口元に笑みを浮かべ、
「それは、僕では分からないですよ。
　しかし、その女性は中にいた二人の男女を知っていたんじゃないかな。そうでなければ、泣きながら監的哨を後にはしないのと違いますかね」
　と、些か自信有りげな表情で言った。
―なるほど。その可能性は十分にあると思いますね。
「では、葛城さんはその監的哨の中を覗き見していた女性に関して何か知ってることはないかな？」
―それが全く知らない女性でしたね。
　と、葛城は決まり悪そうに言った。
「では、その殺された女性、つまり、花田香織さんというんだが、葛城さんは何故花田さんが殺されたのか、心当たりないかな？」
―それは、全くないですね。
　と、葛城は決まり悪そうに言った。
　葛城はそのように言ったものの、米川たちは葛城からもたらされた情報を無視するわけにはいかなかった。

　それはそれとして、花田香織が神島に来た日に、朝倉高志から、高志が島の見所に香織を案内したという情報を得てはいたが、監的哨の中で高志と香織が抱き合ったという話は高志から入手していなかった。それで、米川はその点を高志に確認してみた。
　すると、高志は些か顔を赤らめながらも、それを認めた。
　それで、米川は、
「じゃ、朝倉さんと花田さんが監的哨の中で抱き合っている姿をそっと覗き見し、そして、それを眼にすると、涙を浮かべては去って行ったという女性に関して朝倉さんは心

当たりないかな」
　と、高志の顔をまじまじと見やっては言った。
　すると、高志は眉を顰めては少しの間、考えを巡らすような表情を見せていたが、やがて、高志の脳裏には自ずから恵子のことが浮かんだ。
　しかし、あの時に、恵子が監的哨に来ていたのかと思うと、恵子ではないのかとも思えて来た。いくら小さな島といえども、あの時に、高志と香織が監的哨に来ていたということを恵子が知ってる筈はないのだ。
　そう思うと、高志は米川に恵子のことに言及するのを躊躇った。
　そんな高志に、米川は、
「その女性は、朝倉さんか花田さんの知人だと思うんや。そうでなければ、涙を浮かべては去って行く筈はないやろ。
　じゃ、朝倉さんと花田さんのどちらの知人かというと、やはり朝倉さんの方と思うな。花田さんには島に知人はいないやろからな」
　と言っては小さく肯いた。
　米川にそう言われると、高志はやはりその女性は恵子である可能性が高いと思った。
　とはいうものの、
「では、刑事さんはもしその女性が僕の知人だとしたら、どうだというんや？」
　と、高志は甚だ興味有りげに言った。
「そりゃ、その女性が朝倉さんとどういった関係の女性なのか分からんと、何とも言えんよ」
　と、米川は眉を顰めた。
　米川にそう言われ、高志は恵子のことを言おうか、言うまいか迷ったのだが、調べればどうせ警察は恵子のことを突き止めると思い、高志は恵子のことや、高志が恵子とどんな関係になっているのかを話した。
　すると、米川は些か満足したように肯いた。
　そんな米川に、高志は、
「どうかしたんか？」
　と、訊いてみた。
「どうかしたんかって、そりゃ、その宮田恵子という女性が、有力な容疑者となったということや。
　つまり、宮田さんは花田さんに嫉妬し、花田さんを殺したということや。宮田さんと朝倉さんは将来結婚する約束になっとったのに、朝倉さんが花田さんと深い関係になってることを知り、このままでは朝倉さんを盗られてしまうという危機感や嫉妬などの感情から、宮田さんが花田さんを殺したというわけや。こんなことは素人でも分かるやろ」
　と、米川は些か満足したように肯いた。
　そう米川に言われてしまい、高志は狼狽したような表情を浮かべた。米川はどうやら香織殺しの犯人として、恵子のことを疑ってしまったみたいだからだ。
　そう思った高志は、米川に恵子のことを話してしまったことを後悔してしまった。いくら何でも、恵子は人殺しはしないと思ったからだ。
　それで、高志は米川に恵子は人を殺したりはしないと言った。

　すると、米川は、
「朝倉さんが宮田さんのことを庇う気持ちは分かるよ。何しろ、朝倉さんと宮田さんは、将来結婚されるつもりだからな。
　しかし、朝倉さんは女性というものに詳しくないかもしれんな。女性というものは、自らの男を横取りした相手を許せないものなのさ。三角関係の縺れで殺人事件になったケースはこれまでいくらでもあるんや。それ故、今回もそのケースやないかな」
　と、自信有りげな表情と口調で言った。
　米川にそう言われると、高志は返す言葉がなかった。米川の様があまりにも自信有りげだったからだ。今や米川は、恵子が香織殺しの犯人と決めつけてるかのようであった。
　渋面顔を浮かべては口を噤んでいる高志を眼にして、米川は唇を歪め、薄らと笑みを浮かべた。そして、
「朝倉さんは宮田さんの写真を持っとるよな」
「そりゃ、持っとるが」
「じゃ、その写真を貸してくれるかな」
　と言った米川は、まるで高志を威圧するかのようであった。それは、まるで上司が部下に命令してるかのようであった。
　それで、高志は米川に恵子の写真を渡した。
　その写真を受け取ると、米川は、
「その写真で監的哨の中を覗き見していた女性が、宮田さんだったのかどうか、確認してみるよ」

容疑者

四章　容疑者

今や米川たち捜査陣の表情は、かなり生き生きしたものであった。それは、正に犯人逮捕は後一歩だと言わんばかりの時に見せる表情であるかのようであった。

米川は葛城五郎に高志から借りた恵子の写真を見てもらったところ、監的哨の中を覗き見していた女性は恵子に間違いないという証言を得た。

また、恵子の母親の春子が、高志と香織と思われる女性が神島港を後にし、大崎荘の方へ歩いて行くのを険しい表情でじっと見ていたという証言も漁協関係者から得ていた。即ち、香織が被害に遭った日に、春子は高志と香織のことを恵子に話し、その結果、恵子は高志と香織が監的哨に行くと予想し、恵子は監的哨で二人を待ち伏せしていたのかもしれない。

そして、高志と香織の仲がまさかと思う位、深いものになっていた事実を目の当たりにして、恵子は事に及んだというわけだ。

捜査陣はこれによって、香織が殺された動機と犯人は説明出来ると看做し、恵子から直接話を聴くことになった。

そして、まず七月二十二日の午後六時から七時頃にかけての恵子のアリバイを確認してみた。

すると、恵子は、

「その頃は私は家におったんや」

と、何ら躊躇うことなく言った。

「家族の者と一緒におったのか？」

と、米川。

「違う。父も母もその頃は伊勢に行っとったんや。伊勢の知人の宴会があったんや。そして、その日は二人共、その知人の家に泊まったんや」

「となると、宮田さんはその頃は一人でこの家におったのかい？」

と、米川は眉を顰めた。

「ああ。そうや。しかし、それがどうかしたんか？」

と、恵子は怪訝そうな表情を浮かべては言った。

その恵子の問いに米川は答えずに、

「では、宮田さんは神島出身で今は東京の大学に通っている朝倉高志さんと将来結婚するとか」

と、恵子をまじまじと見やっては言った。

「ああ。そうや。そんなこと、決まっとるやんか」

　と、恵子は何故そのようなことを訊くのかと言わんばかりに、眼を大きく見開いては言った。
　すると米川も眼を大きく見開き、
「そうらしいな」
　と、これは失礼しましたと言わんばかりに言っては、
「で、朝倉さんは七月二十日に神島に帰って来たんやな」
「ああ。そうや」
「宮田さんは二十一日に朝倉さんと会ったのかい？」
「ああ。そうや。でも、二十日も会っとるぜ。あたしは高志さんの帰りを港で待っとったからな」
　と、恵子は些か誇らしげに言った。
「そうか。で、七月二十二日のことなんやが、朝倉さんは朝倉さんの知人が神島港に来るのを港で待っとったらしいが、そのことを宮田さんは知っとったかい？」
　と、米川が言うと、恵子の顔色が変わった。どうやら、恵子は訊かれたくないことを訊かれたかのようであった。
　恵子が何も言おうとはしないので、米川は、
「僕の質問に答えてくれんかな」
　と、些かむっとした表情を浮かべては言った。
　すると、恵子は、
「知らんよ。そんなことは」
　と、素っ気ない口調で言った。
「そうかな。じゃ、七月二十二日の午後四時頃、宮田さんは監的哨にいたよな？」
　と、米川は恵子を睨み付けるかのように言った。そんな米川の表情は、まるで網に捕獲した獲物は逃がさないぞと言わんばかりであった。
　すると、恵子は米川から眼を逸らせ、何も言おうとはしなかった。そんな恵子の表情は、不貞腐れたようなものであった。
　米川の問いに恵子が不貞腐れたような表情を浮かべては何も言おうとはしないので、米川は、
「どうなんや」
　と、恵子に詰め寄るかのように言った。
　すると、恵子は米川を見やっては、
「何でそんなこと、訊くんや」
　と、些か不満そうに言った。
　すると、米川も不満そうな表情を浮かべては、
「僕の問いに答えてくれんかな」
　と言っては眉を顰めた。
　すると、恵子は、
「そりゃ、行ったことは行ったけど.....」
　と、米川から眼を逸らせては、決まり悪そうに言った。
　すると、米川は些か満足そうな表情を浮かべては小さく肯き、

「では、監的哨に行っては何をしとったんや」
　と、恵子をまじまじと見やっては言った。
　すると、恵子の言葉は再び詰まった。それは、正に訊かれたくないようなことを訊かれたと言わんばかりであった。
　だが、恵子は米川を見やっては、
「お巡りさんは何でそんなことを訊くんや」
　と、再び不満そうに言った。
　すると、米川は眉を顰めては、
「一々そんなことも説明せなならんのか」
　と、些か吐き捨てるかのように言った。
「ああ。説明してや。あたしは分からんで」
　と、恵子は渋面顔を浮かべた。
「じゃ、説明するよ。
　監的哨でその時あんたが見ていたのは、朝倉さんと花田香織さんという女性や。で、その二人は抱き合っとたんや。宮田さんはその二人が抱き合っとるのを眼にしたんや。そうやろ？」
　と、米川はまるで恵子を威嚇するかのように言った。
　すると恵子は米川に眼を向けては、
「そんなもの、見てへんわ」
　と、つっけんどんに言った。
「嘘をつけ！　　あんたは朝倉さんと若くて綺麗な女性が監的哨の中で抱き合っとるのを見てしまったんや。あんたは恐らく漁協で働いてるお母さんから朝倉さんと花田さんが大崎荘の方に向かってるという話を聞いたんや。
　それで、あんたは二人が島の見所を回ると察知し、そして、監的哨にも来ると思い、監的哨近くの木立に隠れ、二人を待ち伏せしとったんや。
　すると、案の定、二人は監的哨にやって来たんや。しかし、二人はなかなか外に出て来んので、あんたはそっと監的哨に近付き中を覗き見したんや。すると、二人が抱き合っとるのを見てしまったんや。
　朝倉さんがあんたと何の関係もない男なら、あんたはどうということはなかったんや。だが、そうではなかった。それ故、あんたは朝倉さんに裏切られたショックや悔しさで涙を浮かべてしまったんや。その時のあんたを眼にしたと証言した人がおるんや」
　と、米川はいかにも力強い口調で言った。
　米川の話に何ら表情を変えずに黙って耳を傾けていた恵子は、米川の話が一通り終わると、
「それがどうしたって言うんや」
　と、不貞腐れたような表情を浮かべては言った。
「どうしたって、あんたという人は本当に白々しい人やな」
　と、米川はいかにも困った人物だと言わんばかりに言った。
　そして、恵子を見やっては、
「朝倉さんと抱き合っていた女性をあんたは知っとるな」

「いや。知らんよ」
　と、恵子は大きく頭を振った。
「ふん！　　よくぞそこまで白を切れるもんやな。
　じゃ、僕の口から説明することにするか。
　その女性は花田香織さんといって、東京の人で七月二十二日の午後二時三十分頃に神島に着いたんや。だが、その日の午後六時から七時頃にかけて何者かに殺されたんや！」
　と、米川は声高に言っては恵子を睨み付けた。
　すると、恵子は開き直ったような表情を浮かべては、
「それがどうかしたんか」
　と、逆に米川を睨みつけた。
「どうかしたんかって、あんたはまだ白を切るつもりなんか。じゃ、何故僕がさっき、あんたが二十二日の午後六時から七時頃にかけて何をしてたかって訊いたけど、何故訊いたかはもう分かるやろ」
　と言っては、米川は再び恵子を睨み付けた。
　すると、恵子は顰面をしては少しの間、言葉を発そうとはしなかったが、やがて、
「あんた、あたしのことを疑っとるんと違うか？」
　と、むっとした表情を浮かべては言った。
　すると、米川はにやっとしては、
「正にそうや。あんたのことを疑っとるよ。
　あんたはあんたのフィアンセとでもいえる朝倉さんの気を惹いた花田さんのことを許せなかったんや。それで、花田さんを大崎荘から古里の浜に連れて行ったりしては、花田さんの隙を見ては鈍器で花田さんの後頭部を殴打しては殺したんや。
　これが、花田さん殺しの真相や。そうやろ」
　と、正に勝ち誇ったように言った。そんな米川は、花田香織の事件の真相はこうに違いないと言わんばかりであった。
　すると、恵子は、
「違う！　　あたしはそんなことしやへんぜ！」
　と、激しい口調で言った。
「そんな言い訳は通用せんぞ！
　我々が捜査した限り、あんた程犯人にぴったりの人はおらんのや。つまり、花田さん殺しの犯人はあんたや！　　動機は嫉妬とか邪魔者の排除とかいったものや。花田さんがいなければ、朝倉さんはあんたの許に戻って来るとあんたは思ったんや。それに、二十二日の午後六時から七時にかけてのあんたのアリバイが曖昧なこともあんたに不利や。あんたの両親がその時、家にいなかったことも、あんたの犯罪意欲に火をつけたのかもしれん。そうなんやろ！」
　と言っては、米川は恵子を睨み付けた。
「違う！　　あたしはそんなこと、やってへん！」
　恵子は声高に言った。
　すると、奥の部屋で黙って二人の話に耳を傾けていた恵子の母親の春子がその時、二人の前に姿を現した。そして、

「お巡りさん。うちの恵子が人殺しなんてすることはあらへんよ」
　と、引き攣った表情で言った。
「そりゃ、母親が娘を庇う気持ちは分かるよ。でも、状況証拠では恵子さんが犯人だと示してるんや」
　と、米川は冷ややかな眼で春子を見やった。
「しかし、確証はないんやろ？」
「そりゃ、そうや」
　と、米川は決まり悪そうに言った。
「だったら、恵子じゃないよ。状況証拠に恵子が不利なものがあるといっても、恵子が犯人とは限らんやんか。警察が勝手に決めてるだけやんか。そうやないか！」
　と春子はいかにも不満そうに言った。
　このような母娘を相手にしていても、埒が明かないと米川は思い、この辺で一旦恵子宅を後にすることにした。
　そして、花田香織の死亡推定時刻頃、恵子の姿が大崎荘周辺とか古里の浜で眼にされてないかの聞き込みが行なわれることになった。もし恵子の姿が確認されれば、恵子を追い詰めることは可能であろう。
　だが、聞き込み捜査はなかなか成果を上げることは出来なかった。

　そんな米川たちの捜査を覆すかのような情報が、米川たちに飛び込んで来た。それは、香織の膣内で精液が見付かったというものであった。即ち、香織は性交後、殴打され、事切れたというわけだ。香織の衣服が乱れてなかったのは、顔見知りの犯行である可能性があるというものだろう。
　そして、これによって、恵子犯人説は一気に吹き飛んでしまったというわけだ。

　米川はいかにも面目ないと言わんばかりの表情で、
「宮田さんには申し訳ないことをやってしまった.....」
　と、若手の中村刑事（２８）に言った。
「仕方ないやないですか。状況証拠を見れば、誰でも宮田さんが怪しいと思いますよ。でも、花田さんが死の直前に性交しとったとは。そういうことは、もっと早く明らかにしてもらいたかったな」
　と、中村刑事は、香織の遺体を解剖した解剖医に文句を言った。
「しかし、誤認逮捕せんで良かった。といっても、宮田さんには悪いことしてしまったな」
　と、米川はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべた。
「しかし、警部。宮田さんが犯人でないと断言するのは、まだ早いとちゃうかな」
　と、中村刑事は眼をキラリと光らせては言った。
「それ、どういうことや」
　と、米川は納得が出来ないような表情を浮かべては言った。
「つまり、花田さんと性交した男は、ただ性交しただけで、殺しはしなかったということや」
　と言っては、中村刑事は小さく肯いた。

「なるほど。その可能性もあるな」
　と、米川は眉を顰めた。
「で、宮田さんはその場面を密かに見ていたのかもしれませんよ。
　で、宮田さんは性交後の花田さんの隙を見ては殺したのかもしれないということや」
　と、中村刑事は些か自信有りげな表情と口調で言った。
「なるほど。その可能性がないともいえんな。それ故、宮田さんが大崎荘周辺や古里の浜で目撃されてないかの聞き込みはまだ続けなければならんな」
　と、米川は渋面顔で言った。

　香織の膣内で精液が見付かったことを受けて、花田香織の交友関係が捜査されることになった。そして、その捜査は警視庁に行なってもらうことにした。香織は東京の人間だったからだ。
　すると、一人の男が早々と浮かんだ。
　それは末吉安吉（２３）という男だった。末吉は以前、香織と付き合っていたのだが、香織から嫌われてしまい、香織から別れ話を切り出されたのだが、末吉は香織のことを諦め切れずに、香織宅に何度も押し掛けたり、携帯電話に何度もメールを送るなどのストーカー行為を行なっていたというのだ。香織は友人に度々末吉への苦情を言っていたとのことだ。
　その末吉が何と、香織が死亡した頃、神島に来ていたことが早々と明らかになったのだ。というのも、末吉宅を訪れた警視庁の田中刑事（３０）に、末吉は早々と香織が死亡した頃、神島にいたことを認めたからだ。また、香織と同様に大崎荘に宿泊していたことも認めた。
　更に、早々と香織が死亡した頃、香織と性交したことも認めたのだ。
「香織の奴が悪いんだ。前は度々好きなようにやらせてくれたのに、田舎から出て来た冴えない野郎に現を抜かせやがって！」
　ポマードをつけた髪に手を当てては、その長身でごつい身体付きをした末吉は、いかにも不満そうだった。
「だから、三重県の神島まで花田さんを追いかけて行っては、無理矢理やろうとしたのだが、拒否された。それで、暴行後に殺したのかい？」
　田中刑事は末吉を睨め付けた。
「冗談じゃない！　俺は殺ってないぜ！　それに暴行ではないですよ。花田さんは俺とセックスすることを拒まなかったんだ。だから、合意の上でやったんだ！」
　と、末吉は田中刑事のことを分らず屋めと言わんばかりに言った。
　すると、田中刑事は眉を顰めては、
「合意の上？　それ、どういうことなんだ？」
　と、些か納得が出来ないように言った。
　すると、末吉は眼を大きく見開きギラギラと輝かせては、
「では、刑事さん。何故俺が花田さんが神島に行ったことを知ってたと思いますか？」
　と言い、そして、
「実は花田さんから直に聞いたからなんですよ」

と、田中刑事の顔をまじまじと見やっては言った。
「直に聞いた？　では、花田さんは何故あんたにそのことを話したんだい？　花田さんはあんたからストーカー行為を受けて迷惑してたんじゃないのかな」
と、田中刑事はいかにも納得が出来ないように言った。
「だから、花田さんは心の中ではやはり俺に気があったんですよ。そうでなければ、俺にそう言うわけないじゃないですか」
と言っては、末吉はにやにやした。
だが、その末吉の笑みは直ぐに消えた。香織が死んだことを思い出したのかもしれない。
田中刑事はその末吉の言葉を全面的に信じたわけではなかったが、
「じゃ、あんたはどうやって大崎荘に泊まっていた花田さんと会ったのかな？　大崎荘に泊まってることを花田さんはあんたに話したのかい？」
と、末吉を見やっては言った。
「正にそうですよ。だから、僕は花田さんと大崎荘の前で会い、古里の浜まで行き、そこでセックスをしたのですよ」
と、末吉は淡々とした口調で言った。
「それは七月二十二日の何時頃のことかい？」
「六時前のことだったよ」
「なるほど。では、どうしてあんたは神島まで行ったのかい？」
と、田中刑事は些か納得が出来ないように言った。
「どうしてって、そりゃ、花田さんと縒りを取り戻そうと思ったからですよ。神島の自然の中で言い寄れば、花田さんはまた僕のことをもう一度、好きになるんじゃないかと思ったのですよ」
と言っては、末吉はポマードが掛かった髪に手を当てた。そして、
「案の定、花田さんは僕に身体を許してくれました。そして、久し振りに味わった花田さんの身体でした。つまり、僕は花田さんを暴行したりしませんよ。合意の上での性交だったのですよ」
と、末吉は眼を大きく見開き、力強い口調で言った。そんな末吉は、正に末吉のその言葉には何ら嘘偽りはないと田中刑事に訴えてるかのようであった。
その末吉の説明を聞き、田中刑事は渋面顔を浮かべた。今の説明は事実であるかもしれないと思ったからだ。
だが、田中刑事は眼を大きく見開き、
「では、何故花田さんの膣内にあんたの精液が残ってたんだ？」
と、いかに納得が出来ないように言った。
すると末吉は、
「だから、花田さんが中に出していいと言ったからですよ」
と、田中刑事から眼を逸らせては、いかにも決まり悪そうに言った。
「しかし、そんなことすれば妊娠してしまうじゃないか」
「だから、その日は安全日だったのかもしれませんね。以前も中に出したことがありますからね。それ故、その時もそうだったんじゃないですかね」

と、末吉は些か顔を赤らめては言いにくそうに言った。
そのように末吉に言われ、田中刑事の言葉は詰まってしまった。末吉の話はもっともらしかったからだ。
「じゃ、体位は？」
田中刑事がそう言うと、末吉は、
「そんなことまで話さなければならないんですか」
と、些か不満そうに言った。
「ああ。何もかも正確に知りたいんだよ」
と、田中刑事はそれは当然だと言わんばかりに言った。
すると、末吉は渋面顔で、
「正常位でしたよ」
「正常位か。では、何分位セックスをしてたんだ？」
「五分位じゃなかったから。僕はすぐに果てましたからね」
「しかし、浜でセックスをすれば、他人に見られてしまうんじゃないかな？」
と、田中刑事は眉を顰めた。
「刑事さんは神島に行ったことがないから分からないんでしょうが、あの時は誰もいませんでした。それに、元々ひとけの無い浜のようだったので。だから、そこでやったのですよ」
と言っては、末吉は唇を噛み締めた。
「じゃ、花田さんとセックスを終えたのは、六時位だったのかい？」
「その位の時間だったと思いますね」
「それから、あんたと花田さんはどうしたんだ？」
「二人で大崎荘の方に向かって歩き始めましたよ。その頃は僕は花田さんと縒りを取り戻したみたいな関係となってたよ」
と、末吉は些か笑みを浮かべては言った。だが、
「あっ！　そうだ！」
と、渋面顔で、また甲高い声で言った。
「どうかしたのかい？」
そんな末吉に興味を示した田中刑事は、いかにも興味有りげに言った。
「刑事さん！　分かりましたよ！　犯人が分かりましたよ！
花田さんを殺したのはあいつです！　あいつが犯人です！　あいつ以外に考えられません！」
と、末吉はいかにも力強い口調で言った。そんな末吉は、正に勝ち誇ったかのようであった。
すると、田中刑事は、
「あいつだけでは分からないじゃないか！　詳しく話してくれよ」
と、末吉を急かすかのように言った。
「僕と花田さんが大崎荘に向かって歩き始めた頃、花田さんは知ってる男を浜で見付けたみたいなんですよ。だから俺に『先に戻ってて』と言ったんですよ。
そして、それから花田さんはもう僕とは会うことはなかったのですよ。

で、実は俺はその夜、花田さんともう一度セックスをしようと思っていたのですが、花田さんは扉を開けてはくれませんでした。
それ故、花田さんは俺のことをまた拒んだのではないかと思ったのですよ。
それで、翌朝はもう花田さんに声を掛けることなく東京に戻ったのですが、まさかその頃はもう既に殺されていたなんて、夢にも思ってなかったですよ」
と、末吉はいかにも決まり悪そうに言った。
そう言った末吉の表情と口調を見ると、末吉が嘘をついてるようにはとても思えなかった。
「じゃ、花田さんはあんたと別れた後、その花田さんの知人と思われる男性と浜で話したのかい？」
「そうだと思いますよ。花田さんが僕に『先に戻ってて』と言った時の花田さんの素振りを見ると、明らかにその男が花田さんの知人だということを物語ってましたからね」
と言っては、末吉は小さく肯いた。
そう末吉に言われると、田中刑事も小さく肯き、
「では、その知人らしき男性は、どんな男性だったんだい？　年齢とか身体付きなんかは分かるかい？」
と、田中刑事が言うと、末吉は渋面顔を浮かべては何やら考え込むような仕草を見せていたが、やがて、
「若い男でしたね。俺と似たような年齢だったと思います。もっとも、少し眼にしただけなんで、はっきりしたことは言えないですね。それに何となく素朴な感じで都会の男というより、地元の男のように見えましたよ」
と、眉を顰めては言った。
「しかし、花田さんは東京の人間だよ。三重の神島には知人はいないと思うがね」
と、田中刑事は渋面顔で言った。
「そう言われても……。ただ、俺はそんな感じがしたんだよ。ただ、それだけなんで……」
と、末吉は決まり悪そうに言った。
「花田さんはあんたと浜で別れた後、少しして頭を鈍器で殴打され、死亡したんだよ。明らかに殺しなんだ。
となると、あんたが眼にしたその若い男が有力な容疑者となるんだがね」
と、田中刑事は眼をキラリと光らせては言った。
「そうなりますね。俺はその若い男が犯人だと思いますよ」
と、末吉は田中刑事に相槌を打つかのように言った。
「でも、何故その男が花田さんを殺したんだい？」
と、田中刑事は納得が出来ないように言った。
すると末吉は眼を大きく見開き、
「つまり、その若い男は、俺と花田さんがセックスをするのを密かに見ていたのですよ。で、俺が花田さんの許を去って行った後、花田さんに迫ったんじゃないかな。俺とやったみたいに、やらせてくれと。しかし、花田さんはそれを拒んだ。
それで、その男は無理矢理やろうとしたんじゃないかな。しかし、花田さんは頑なに拒んだ。

　それで、そいつはかっとして殺してしまったんだ！　そうですよ、刑事さん！　そうに決まってる！」
　と、いかにも自信有りげな表情と口調で言った。そんな末吉は、香織の事件の真相はそうに違いないと言わんばかりであった。
　そう末吉に言われると、田中刑事もその可能性が高いと思った。
「でも、あんたはその男に心当たりないのかい？」
　と、田中刑事は改めて訊いた。
「そうなんですよ。全く心当たりないのですよ」
　と、末吉はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべては言った。
「写真があれば、ある程度その男だと言えるかい？」
「ある程度は言えるもしれないですね」
　と末吉は些か自身無げに言った。
　末吉から話を聞いて、捜査はかなり前進したという感触は得た。
　それで、田中刑事が捜査した結果を鳥羽署の米川警部に報告した。
　それを聞いて、米川は、
「それは意外やったな」
　と言っては眉を顰めた。
―僕も意外に思いましたよ。てっきり、末吉が犯人だと思ってましたからね。
　で、末吉の話が事実だとしたら、神島周辺で住んでいそうなその若い男に関して、米川さんは心当たりありますかね？
　と、田中刑事はいかにも興味有りげに言った。
　すると、米川は眼を大きく見開き、
「それがあるんや」
　と弾むような口調で言った。というのも、米川の脳裏には朝倉高志のことが即座に思い浮かんだからだ。朝倉高志こそ、その若い男にぴったりだったからだ。
―そうですか。となると、その男のことを捜査しなければなりませんね。
　で、その男はどういった男なんですかね？
　と、田中刑事は興味有りげに言った。
「朝倉高志という男なんや。神島出身なんだが、今は東京の大学に通っとる。そして、アルバイト先で花田さんと知り合ったようや。
　で、花田さんが神島に来たのは、朝倉と会う為だったそうや。花田さんは二十二日の午後二時半頃、神島に着いたみたいや。そして、岸壁で朝倉が花田さんを待っとったらしい。そして、それから朝倉は花田さんを神島の見所に案内したみたいや」
　と米川は、田中刑事に朝倉のことを説明した。
―なるほど。そういった人物ですか。そういった人物なら、十分に有力な容疑者となりますね。
　と、正に田中刑事は朝倉高志こそ、犯人に違いないと言わんばかりに言った。
　だが、
―神島周辺に朝倉さんのような人物は他にいないのですかね？
「ああ。そうや」

と言ったものの、米川の心の中ではあの人良さそうな朝倉高志が犯人ということには、抵抗を感じないわけではなかった。
そんな米川に、田中刑事は、
―やはり、犯人は朝倉高志ですよ。朝倉は末吉と花田さんがいちゃいちゃしてるのを見て、裏切られたと思ったのですよ。それで、かっとして殺したのですよ。もっとも、殺すつもりはなかったが、結果として死んでしまったのかもしれません。そして、翌朝、平然とした表情で大崎荘に現われ、花田さんと待ち合わせをしていたという演技をしたのかもしれないですね。
と、田中刑事はその可能性は十分にあると言わんばかりに言った。
そう田中刑事に言われると、米川は言葉を詰まらせた。確かにその可能性は十分にあると思ったからだ。
―で、花田さんと末吉とのセックスを盗み見していた男のことを末吉はある程度は分かると言ってたので、朝倉さんの写真をこちらに送ってもらえませんかね。末吉に見てもらうので。
と、田中刑事が言ったので、早速朝倉の写真を田中刑事の許に送った。
その朝倉の写真を見ると、末吉は、
「この男であるような気がするよ。断言は出来ないが」
と言った。
とはいうものの、これによって、米川は直ちに朝倉から話を聴くことになった。

米川が神島内にある朝倉宅を訪れると、高志は眉を顰めた。そんな高志は、米川の来訪の意図が分からなかったようだ。
そんな朝倉に米川は、
「朝倉さんに聴きたいことがあるんや」
と、穏やかな表情と口調で言った。
「俺に聴きたいこと？」
と、高志は素っ気ない口調で言った。
「朝倉さんは七月二十二日に花田さんが神島港にやって来たのを港で迎えると、花田さんを大崎荘まで送って行っては、それから神島の見所を案内したんやな？」
「そうや」
と、高志はそれが何か問題なのかと言わんばかりに言った。
「では、その日、花田さんと別れたのは、何時頃やったんや？」
「午後五時頃やったかな」
「何処で別れたんや？」
「大崎荘の前や」
「では、その日は、それから花田さんとはもう会わなかったのかい？」
「そうや」
と、高志は何ら表情を変えずに淡々とした口調で言った。
「そうかい。じゃ、お母さんを呼んで来てもらえんかな」
と米川が言った。

そんな米川の言葉を聞いて、高志は怪訝そうな表情を浮かべはしたが、とにかく高志の母親の花子を米川の許に連れて来た。花子は　五十代の半ば位の年齢で、ふっくらとした感じの人良さそうな女性であった。
そんな花子に米川は、
「七月二十二日の午後五時から六時頃やけど、その頃、高志さんはこの家におったかな？」
と、花子の顔をまじまじと見やっては言った。
すると、花子は、
「どうやったやろ.....」
と、少し考え込むような仕草を見せたが、やがて、
「そういえば、その頃は高志は家におらんだな。父ちゃんが高志にビールを飲ませようとしたんやが、高志がおらんからぶつぶつ言ったのを覚えてるがな」
と、薄らと笑みを浮かべては言った。
そう花子に言われると、米川は眉を顰めた。今の花子の言葉によって、花田香織の死亡推定時刻に高志は家を留守にしていたことが明らかになったからだ。となれば、末吉が古里の浜で眼にしたという若い男は、朝倉高志であった可能性は十分にある。
また、花子がそう言った時の高志の表情を米川は盗み見したのだが、その時の高志の表情が一瞬ではあるが歪んだのを見逃さなかった。
そんな米川は、
「そう奥さんが言われたんやが」
と、高志の顔をまじまじと見やっては言った。
すると、高志は平然とした表情を浮かべては、
「そういえば、その頃は家におらんだかもしれへんな」
と、眉を顰めた。
「何処に行っとったんや？」
米川は高志の顔をまじまじと見やっては言った。
「港の方に行っとたな」
「港か.....。それ以外に何処かに行かへんだんか？」
と、米川は眉を顰めた。
「特に行かへんよ」
「じゃ、港には何しに行ったんや？」
米川は怪訝そうな表情を浮かべては言った。
「特に用なんてあらへん。ただ、行っただけや」
と、高志はそれが何か問題なのかと言わんばかりに言った。
「じゃ、大崎荘の方には行かんだかい？」
「ああ。行ってへん」
高志は平然とした表情で言った。
「それは間違いないんか？」
米川は念を押した。
「ああ、間違いない」
と、高志はいかにも真剣な表情を浮かべては言った。そんな高志の表情は、今の高志

の言葉には何ら嘘偽りはないと言わんばかりであった。
「じゃ、話題を変えるが、朝倉さんは花田さんとは一度だけ男女の関係を持ったんやな？」
　そう米川が言うと、高志は些か顔を赤くさせては、
「そうやったかな」
　と、米川から眼を逸らせては決まり悪そうに言った。
「では、そんな花田さんのことを朝倉さんはどう思っていたんや？」
　すると、高志は怪訝そうな表情を浮かべては
「どう思っていたとは？」
　と、今の米川の言葉の意図が今一つ分からないと言わんばかりに言った。
「だから、朝倉さんは、花田さんは自分の女になったんだと思っていたのかということや」
　と言っては、米川は眉を顰めた。
　すると、高志も眉を顰めては、
「自分の女になったなんて、思ってないよ。花田さんは僕なんかにはもったいないような女性だったからな」
「じゃ、花田さんが朝倉さん以外の男と付き合うようになったとしたら、朝倉さんはどう思う？」
「どう思うとは？」
　高志は怪訝そうな表情を浮かべては言った。
「だから、自分以外の男と関係を持ったのは許せないとか思わなかったのかということや」
　と、米川は渋面顔を浮かべては言った。
　すると、高志は些か笑みを浮かべては、
「そんなことは思わんよ。俺と花田さんは単なる友人やったからな」
「そうかな。じゃ、花田さんが神島にやって来た日の午後六時頃、朝倉さんを古里の浜で眼にしたと言った人がおるんや」
　と、米川は些か言いにくそうに言った。
　そう米川が言っても、高志は特に表情を変えることなく、
「それは見間違えやないかな」
　と、淡々とした口調で言った。
「でも、その頃は朝倉さんは家におらんだんやろ？」
「それはそうやが……」
「だったら、古里の浜に行ったかもしれんな」
　と言っては、米川は小さく肯いた。
「でも、誰がそんなことを言ったんや？」
　と、高志は些か納得が出来ないような表情を浮かべては言った。
「朝倉さんの知らない人や」
「俺の知らない人か。だったら。その人は俺かどうかなんてことは分からんよ」
　と、高志は、米川は何を言うのかと言わんばかりに言った。
「知らない人だから、正直に話すんや。その人物に朝倉さんの写真を見せたら、その時に眼にした若い男は、朝倉さんだろうと言ったからな」

と、米川は高志を睨め付けるかのように言った。
「その人物が眼にしたというのは、午後六時頃なんやろ。だったら、かなり暗くなってたやないか。それなのに、人の顔の区別がつくかいな。つかんよ。その人物はいい加減なことを言っただけやろ」
と、今の米川の話は話にならんと言わんばかりに言った。
「六時なら、まだまだ明るいよ。だから、人の区別位出来るやんか」
米川がそう言うと、高志は言葉を詰まらせた。
だが、程なく、
「でも、その頃、俺が古里の浜にいたとしたら、どうだと言うんや？」
と、些か興味有りげに言った。
すると、米川は、
「花田さんの死亡推定時刻は二十二日の午後六時から七時頃なんや。
そして、その頃、花田さんが朝倉さんと会っていたとしたら、朝倉さんは花田さんが生きていた時に、最後に会った人物となるかもしれん。それで、そうやないのかと確認しとるんや」
と、ここまで言えば、何を言いたいのか分かるやろと言わんばかりに言った。
「なるほど。そういうことか。
でも、俺はその頃、古里の浜におらんだから、俺は花田さんと会った最後の人物ではないよ」
と、高志は平然とした表情と口調で言った。そんな高志は、正に香織の死には何ら関係ないよと言わんばかりであった。
それで、米川はこの辺で高志の許を去ることにした。高志は香織の死亡推定時刻に古里の浜に来てないと頑なに主張するので、今の時点ではこれ以上強く出れないと思ったからだ。
朝倉高志宅を後にすると、米川は末吉安吉の証言と朝倉高志の証言のどちらが正しいのかと考えてみた。もし、末吉の証言が正しいのなら、高志は嘘をついたということになり、そんな高志が花田香織を殺したという可能性は十分に現実味のある推理となるだろうが、高志の証言が正しいのなら、高志は香織の死には無関係となりそうだ。
それで、米川は米川の推理を警視庁の田中刑事に話してみた。
すると、田中刑事は、
―末吉が七月二十二日の午後六時前、古里の浜で花田香織さんとセックスをしたことは絶体に間違いないと言いました。もっとも、その後、眼にした男は朝倉高志に似てるようだが、少し暗かったので、断言は出来ないと言ってましたね。
と、眉を顰めては言った。
「そうですか。でも、その話を朝倉さんは頑なに否定するんや」
―そりゃ、朝倉さんが犯人なら頑なに否定しますよ。そのことが分からない程、朝倉さんは馬鹿ではないでしょう。
それに、朝倉さんが犯人なら、動機もうまく説明できますよ。即ち、自分の女と思っていた花田さんが、他の男とセックスしたのを眼にしてしまい、かっとして殺してしまったのですよ。もっとも、殺すつもりはなかったが、殺してしまったのかもしれませんがね。

田中刑事は些か自信有りげに言った。

それを受けて、朝倉高志と思われる男が七月二十二日の午後六時前後に大崎荘周辺、古里の浜周辺で目撃されてなかったか、島民たちに聞き込み捜査が行われた。そして、高志への捜査が行なわれているという情報は、早々と宮田春子の耳に入った。
そんな春子は渋面顔で、
「えらいことになっとるぞ」
と、恵子に言った。
「それ、どういうことや」
恵子も渋面顔で言った。
「高志さんが警察の捜査の対象になっとるんや。高志さんの写真を持って警察があっちこっちで聞き込みを行なっとるんや。漁協で働いてる私の仕事仲間の堀田さんや種村さんも話を聞かれたそうや。七月二十二日の午後六時頃に大崎荘周辺や古里の浜で高志さんを見なかったかというように」
と、春子は決まり悪そうな表情を浮かべては言った。
「何で高志さんが警察にそんなことされてるんや」
恵子はいかにも納得が出来ないような表情と口調で言った。
「はら。先日、古里の浜で東京の若い娘が死体で見付かったという事件があったやないか。その女の人は何者かに鈍器で頭部を殴られた為に死んだそうや。つまり、殺人事件や。
で、警察が高志さんの写真を持って聞き込みを行なっとるということは、高志さんが容疑者になっとるんやないかな」
と、春子は渋面顔で言った。
「何で高志さんが容疑者になっとるんや」
恵子は納得が出来ないように言った。
「母ちゃんはそこまでは分からんよ。
でも、その女の件であんたも話を聴かれたんやないんか？」
「そうやったな」
「何であんたが警察に話を聴かれたんやったかな」
「そりゃ、あたしがその殺された女性と高志さんが監的哨で抱き合ってる場面を盗み見してたからや。そんなあたしのことを見てた人がいたんや。その人からあたしのことが分かったんや。
で、あたしと高志さんとの関係などから、あたしがその女性に嫉妬して殺したんやないかと警察は思ったみたいや。それで、あたしは警察から疑われたんや」
と、恵子は不快そうな表情を浮かべては言った。
「しかし、あんたは殺してへんのやろ？」
「当り前や。あたしがそんなことするわけないやんか」
と、恵子は力強い口調で言った。
「だったら、誰が犯人なんや。その女の人が殺されたことは間違いないんやろ？」
そう春子が言うと、恵子は春子から眼を逸らせては少しの間、言葉を発そうとはしなかった。そんな恵子に春子は、

「でも、その女の人は高志さんにとってどういう人やったんかな？」
　と、決まり悪そうな表情を浮かべては言った。
「高志さんが東京で知り合った女性やないかな。それしか考えられへんわ」
「そうやな。わたしもそう思う。
　で、高志さんを慕って神島までやって来たんやろか」
「そうやないかな。
　そんな二人を母ちゃんが港で眼にし、あたしに連絡して来たんで、あたしは二人が監的哨に来ると思い、先回りしとったら、案の定、やって来たというわけや。そして、二人は中で抱き合っとったんや」
　と、恵子はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべては言った。
「つまり、高志さんはあんたを裏切ったというわけや」
　そう春子が言うと、恵子は悔しそうな表情を浮かべては唇を噛み締めた。
　そんな恵子に、春子は、
「高志さんが犯人でなかったらええのにな。高志さんは人殺しをするような人やないぜ」
　と、力強い口調で言った。
「あたしもそう思う。高志さんは人殺しなんかせえへんぜ」

言い争い

五章　言い争い

春子と恵子がそのようなやり取りを交わしていたが、やがて、米川たち捜査陣を喜ばせるような情報を入手するに至った。

　その情報を提供したのは、吉本直哉、直子という名古屋に住んでいる夫婦であった。吉本夫婦は、七月二十二日に花田香織と同じ大崎荘に泊まっていたのだ。

　米川たちは二十二日の大崎荘の宿泊客たちに聞き込みを行なっていたところ、二十二日の午後五時三十分頃、高志と思われる男を大崎荘近くで眼にしたと証言したのだ。

　名古屋の吉本の許を訪れた中村刑事に対して、

「確かにこの男性だったと思いますね。僕たちが眼にしたのは」

　と、しげしげと朝倉高志の写真を眼にしながら言った。

「吉本さんがこの男性を眼にしたのは、大崎荘の近くでしたね？」

「そうです。大崎荘の玄関から十メートル位離れた所でしたかね。僕たちは古里の浜で少し散歩をし、大崎荘に戻ろうとしたところ、この男性と思われる人物と擦れ違ったのですよ。

　で、何故その男性のことを覚えていたかというと、何となく朴訥とした感じで、それが妙に印象に残ったからですよ。僕の友人、知人にはああいったタイプの人はいませんからね」

　と言っては、吉本直哉は小さく肯いた。

「では、その男性の身長は１７０センチ位でしたかね？」

「それ位だったですね。僕の身長と同じ位でしたから」

「では、服装はどんなものでしたかね？」

「グレーのシャツと灰色のズボンだったですね」

　そう言われ、中村刑事は些か満足したように小さく肯いた。何故なら、その服装は高志が語ったものと同じであったからだ。

「では、その男性は、それから何処に行こうとしてたのでしょうかね？」

「さあ.....。そこまでは分からないですね」

　と、吉本直哉は言ったものの、吉本直哉から話を入手して大いに成果があった。朝倉高志と何ら面識がなかった吉本直哉からそういった証言を得たからには、やはり、朝倉高志は香織の死の直前に香織と会っていた可能性は十分にある。そうだとすれば、捜査は大いに前進したと言えるだろう。

中村刑事は鳥羽に戻ると、早速捜査結果を米川に話し、
「吉本さんの証言により、朝倉はもう逃がれられないですよ。動機も十分だから、そろそろ署で訊問したらえんとちゃうかな」
と、米川に言った。
「いや。もう少し証拠が欲しいな。死の直前に朝倉が花田さんと会っていたとしても、殺したとは限らんからな」
と、米川は渋面顔で言った。
「花田さんを殴った凶器なんかが見付かればええんやが」
と、中村刑事も渋面顔で言った。

米川と中村刑事がそのような会話を交わしていた頃、恵子は高志と会っていた。恵子は高志を八代神社の境内に呼び出していたのだ。
八代神社の境内には、今は恵子と高志しかいなかった。だが、森閑とはしてなかった。蝉しぐれがやかましい位であったからだ。
「俺に話って何や？」
高志は怪訝そうな表情で言った。今は夜の気配が漂っていて、わざわざこのような場所に恵子に呼び出されるような話が何なのかと高志は訝しがったのだ。
だが、全くその理由を推測出来ないこともなかった。
それは、高志が島に戻った翌日、恵子が高志に対してやろうとしていた行為、即ち、恵子は再び高志に抱きつこうとするのではないかと高志は思ったのだ。
となると、今回はそれを拒めないのではないのか？　高志の脳裏にそういった思いが過ぎったのだが、恵子はその高志の思いに反して、高志が全く予想だにしてなかった言葉を発した。
「高志さんに訊きたいことがあるんや」
恵子はいかにも神妙な表情を浮かべては言った。
「俺に訊きたいこと？　それ、何や？」
と高志は眉を顰めた。
「高志さんは七月二十二日の午後六時頃、何処におったんや」
恵子はいかにも真剣な表情を浮かべ、高志をまじまじと見やっては言った。
その恵子の言葉を聞いて、高志は一瞬ぎくっとした。何故なら、今の問いは警察の問いと同じものだったからだ。
それで、高志は、
「何でそんなこと訊くんや？」
と、怪訝そうな表情を浮かべては言った。
「それに関しては、今は訊かんで。
で、あたしの問いに正直に答えて欲しいんや。もう一度言うで。高志さんは七月二十二日の午後六時頃、何処におったんや？」
と言ったその恵子の表情と口調は、いかにも真剣なものであった。
すると、高志は眼を大きく見開き、
「何でそんなことを訊くんや。それに関して説明してくれんのなら、今の問いには答えら

れへんは」
　と、高志はむっとしたような表情を浮かべては言った。
「そう……。じゃ、それはそれとして、高志さん。高志さんはあたしのことを裏切ったんやな」
　と恵子は眉を顰めた。その恵子の表情には哀しみと怒りの入り混じったようなものが浮かんでいた。
　そう恵子に言われても、高志は恵子から眼を逸らせては言葉を発することは出来なかった。その事実を恵子は知ってるに違いなかったからだ。
　その恵子の問いに高志がなかなか言葉を返そうとはしなかったので、恵子は、
「答えたくないのやら、それでもかまへんは。でも、あたしは知っとるからな。高志さんが東京で綺麗な女の人と仲良くなり、そして、その女の人が七月二十二日に神島にやって来たことを。そして、高志さんがその女の人を島の見所に案内してやったことを」
「……」
「そして、あたしは高志さんとその女の人が監的哨の中でどんなことをやっとったかを知っとるんや。あたしは高志さんとその女の人との行為を覗き見してたんやから」
　と、恵子は高志を睨み付けるかのように言った。
　そう恵子に言われると、高志はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべては、恵子から眼を逸らすしかなかった。その時、高志はまさか恵子が覗き見してるなんて、思いもしてなかったのだ。正に穴があれば入りたい心境であった。
　だが、
「じゃ、どんなことをしてたのか言ってくれんかな」
　と、高志も些かむっとした表情を浮かべては恵子を見やった。
　すると恵子は眼を大きく見開き、
「その女の人と高志さんは抱き合っとたんや。そして、その女の人はやがて裸になり、高志さんはその女の人のおっぱいを揉んだんや」
　と、顔を赤らめては、面映ゆそうな表情を浮かべては言った。
　だが、その恵子の表情は、程なく険しいものへと変貌した。その恵子の表情は、正にそのような行為を行なった高志のことを強く非難してるかのようであった。
　恵子にそう言われ、高志は言葉を発することは出来なかった。恵子のその言葉は事実だったからだ。
　何ら言葉を返そうとはせずに、恵子から眼を逸らせ、決まり悪そうな表情を浮かべてる高志に対して、恵子は、
「高志さんはその女の人ともう寝たんやろ？」
　と険しい表情で言った。
　すると、高志は、
「そんなこと、どうでもええやろ」
　と、恵子から眼を逸らせては、不貞腐されたような表情と口調で言った。その高志の様は、まるで恵子に痛いところを突かれたささやかな反抗であるかのようであった。
「どうでもええことないわ。あんたはあたしのフィアンセやないか！　そうやのに、その女と寝たとなれば、あたしを裏切ったということになるやんか！」

と、恵子は激しい口調で言った。
恵子にずばり指摘されてしまったので、高志は返答に窮してしまった。もし恵子の言葉を高志が認めてしまえば、恵子だけでなく、高志の両親、そして、恵子の両親まで裏切ったことになってしまうからだ。そうなれば、高志はもうこの島に居辛くなってしまうだけでなく、高志の両親まで背を向けて生きて行かなければならなくなるのだ！
高志が恵子から眼を逸らせ渋面顔で言葉を発そうとはしないので、恵子は、
「高志さんはその女と私のどちらが好きなんや？」
と、いかにも真剣な表情を浮かべては、高志を見据えた。
すると、高志は恵子を見やっては眼を大きく見開き、
「その女は今はいないんや！　死んだんや！　だから、どちらが好きもこうもないやんか！」
と、いかにも開き直ったかのような表情を浮かべては言った。
すると、恵子は高志から眼を逸らせ、哀しそうな表情を浮かべては、少しの間、言葉を発そうとはしなかった。
だが、高志を見やっては、意を決したような表情で、
「高志さんは殺したんやな」
と、呟くような声で言った。
そう恵子に言われると、高志の表情はさっと蒼ざめた。
だが、すぐに元の表情に戻り、やがて、薄らと笑みを浮かべては、
「俺が殺した？　それ、どういうことや？」
と、いかにも納得が出来ないような表情と口調で言った。
高志がそう言うと、恵子は少しの間、言葉詰まらせたが、やがて、高志に眼を向けると、
「あたし、見てしまったんや」
と、いかにも言いにくそうに言った。そして、高志から眼を逸らせたのだが、すぐに高志を見やった。
そんな恵子に、高志は、
「見てしまった？　何を見てしまったんや？」
と、納得が出来ないように言った。
「だから、高志さんがその女を殺した場面よ」　恵子は高志からちらちらと眼を逸らせながら、いかにも言いにくそうに言った。
そう恵子に言われると、高志は表情を強張らせた。
だが、すぐに表情を綻ばせると、
「アハハ.....」
と、声を上げては笑い出した。その高志の様は、正におかしくて堪らないと言わんばかりであった。
そんな高志に、恵子は、
「何がおかしいんや？」
と、むっとした表情で言った。
「何がおかしいんやって、これがおかしくないわけがないやんか！　何を言い出すかと思ったら、そんなとんでもないことを言い出すなんて、俺は想像すらしてなかったやん

か。これが、笑わずにおられるかよ！　アッハッハ！」
　と、高志はさもおかしそうに腹を抱えては大声で笑った。
　すると、恵子は、
「フフフ.....」
　と、声を上げて笑い出した。そんな恵子は、正におかしくて堪らないと言わんばかりであった。
　そんな恵子を見て、高志は笑うのを止め、
「何がおかしいんや？」
　と、些か真剣な表情を浮かべては言った。
　すると恵子は、
「だって、高志さんがあまりにも見え透いた嘘をつくからや！　つまり、あたしは見てしまったんや！　古里の浜で高志さんがあの女の頭を岩のようなもので殴ったのを！」
　恵子がそう言うと、高志は渋面顔を浮かべては何も言おうとはしなかった。そんな高志は、次の恵子の言葉を待ってるかのようであった。
　そんな高志を見て、恵子は更に話を続けた。
「あの日、つまり、七月二十二日の午後六時頃、あたしは大崎荘の方に行ったんや。何故行ったかというと、高志さんと監的哨で抱き合っとった女が大崎荘に泊まったということを知っとたから、その女が宿の外に現われないかと思ったんや。どんな女なのか、じっくりと見物したろうと思っとったんや。
　そしたら、あんたの姿を大崎荘近くで眼にしたんや。高志さんはその女と会う為に来たと察知したんや。すると、頭に血が上って来たんや。
　で、あたしは高志さんがこれからどうするのかと様子を窺っとったところ、高志さんは古里の浜の方に行くやんか。それで、あたしはあんたの後をつけたんや。
　すると、あんたは古里の浜にある岩場まで行くと、少しの間、佇んどったんや。
　そして、少しすると、その岩場の方から若い男女が現れたんや。で、男の方は高志さんの傍を通り過ぎ、大崎荘の方に行ったんやけど、女の方は高志さんの傍らにやって来たんや。その女はあんたと監的哨で抱き合っとった女や」
　と、恵子が力強い口調で言うと、高志は恵子から眼を逸らせては渋面顔を浮かべ、何も言おうとはしなかった。
　そんな高志に対して、恵子は更に話を続けた。
「しばらくすると、その女と高志さんは何やら大声で言い争いを始めたんや。詳しいことは分からんけど、高志さんが大声で言った言葉、つまり、『お前は誰とでも寝る女なんか！』と言ったのは、聞き取れたんや。
　この言葉から推測すると、その女は先程の男と寝たんとちゃうかな。その女は昼間は監的哨の中で高志さんと抱き合っとったんや。夜は別の男とエッチしたんや。
　そんな女を眼にして、その女を自分の女と錯覚しとったあんたは、かっとしたんとちゃうかな。
　で、そんなことを言った高志さんに女は反発したんやないかな。その言葉もあんたをかっとさせた理由やろな。
　それで、あんたは近くにあった岩で女の頭を殴ったんや。あんたの力があまりにも強

かったから、女は死んでしまったんや」
　と、恵子は眼をギラギラさせながら言った。その恵子の表情と口調は、正にその恵子の言葉には、何ら嘘偽りはないと言わんばかりであった。
　恵子にそのように言われ、高志の表情は、正に凍りついたように蒼白になった。その高志の表情を見れば、今の恵子の言葉の正しさを物語ってるかのようであった。
　だが、高志は突如、表情を綻ばせ、
「アハハ！」
　と、大きな声で笑い出した。正におかしくて堪らないと言わんばかりに、腹を抱えて笑い出した。
　そんな高志を眼にして、恵子は、
「何がおかしいんや？」
　と、納得が出来ないような表情と口調で言った。
「何がおかしいかって、これが笑わずにおられるか！　お前は滅茶苦茶な出鱈目を言ったに過ぎないんや。お前の想像での作り話を話してるに過ぎないんや！　だから、おかしくて堪らないんや！　アハハ！」
　と、高志は腹を抱えながら、さもおかしくて堪らないかのようだった。
　すると恵子は真顔を浮かべては、
「あたしの作り話やないぜ。あたしは事実を話しとるんや。　あたしが眼にした事実を話しとるんや！」
「いいや。俺はそうは思わんぞ。お前が言ったことを誰かが聞いても、俺が作り話やと言えば、それで終わりやんか。大体、お前は今言ったことの証拠でも持っとるんか」
　と、高志は恵子を見下すかのような表情と口調で言った。それは、あたかも高志の中で徐々に膨らんで来た今や高志にとって疫病神に過ぎなくなった恵子への思いを具現化してるかのようであった。
　すると恵子は、
「証拠？　それがあるんや」
　と言っては、薄らと笑みを浮かべた。その恵子の表情は、今まで高志が眼にしたことのないような不気味な感じの笑みであった。
　それで、高志は渋面顔を浮かべては、
「証拠？　それ、どんなものなんや？」
　と恵子をまじまじと見やった。
「それは、動画さ。あたしはあたしのデジカメでその場面を動画撮影したんや」
　そう言われ、高志の表情は強張った。何故なら、高志は恵子がデジカメで動画撮影するのが好きなことを知っていたからだ。
　そんな高志に、恵子は眼を大きく見開いては、
「昼間に高志さんとその女が監的哨でやっとったこと眼にして、頭に血が上り、高志さんとその女のことを動画撮影し、これはどういうことやと高志さんに文句を言ってやろうと思っとたんや。高志さんには証拠を見せつけないと、何だかんだと誤魔化すと思っとったからな。
　あたしはそんな高志さんの性格を知っとるから、大崎荘に行った時にはデジカメを

持っとったんや。
　高志さんはそんなあたしのことに気づかんだんや。あたしは気付かれないように注意しとったからな。
　でも、まさか高志さんが岩でその女の頭を殴り殺すとまでは思ってなかったやんか」
　と、興奮気味に言った。そんな恵子は、正にその高志の行為は、信じられないものだったと言わんばかりであった。
　すると、高志は眼を大きく見開き、
「今もその動画撮影したものを持っとるんか？」
　と、今までの表情とは打って変わって、高志はまるで恵子の機嫌を取るかのような表情と口調で言った。
「そりゃ、持っとるがな」
　と、恵子はそれは当然だと言わんばかりに言った。
「だったら、それを俺に見せてくれんかな」
　と、高志は再び恵子の機嫌を取るかのように言った。
　すると恵子は、
「何でや？　何でそんなこと、せなあかんのか？」
　と、高志の表情とは対照的に、いかにも納得が出来ないような表情を浮かべては言った。
「何でやって、そりゃ……」
　高志は言葉を詰まらせてしまった。
　すると恵子は、
「あんたに見せるのは嫌やぜ。見せたら、あんたは壊したりするかもしれんからな」
　と、素っ気なく言った。
　すると、高志は恵子から眼を逸らせては渋面顔で少しの間、言葉を発そうとはしなかったが、やがて、恵子を見やっては、
「お前の意図はどういったものなんや？」
　と言っては眉を顰めた。
「あたしの意図？　それ、どういうことや？」
　恵子は、高志の言葉の意味が理解出来なかったのか、怪訝そうな表情を浮かべては言った。
「つまり、何でそんな話をする為に俺を呼び出したのかということや」
　と、高志は渋面顔で言った。
　すると恵子は、
「そんな話はないやろ。今の話はとっても重要やないか。高志さんの将来を決する位、重要な話やないか。そうやないんか？」
　と、そんなことも分からないのかと言わんばかりに言った。
　すると、高志は恵子から眼を逸らせては、渋面顔を浮かべ、言葉を詰まらせた。そんな高志を見ると、今の恵子の言葉の正しさを認めたかのようであった。
　そんな高志を眼にして、恵子は、
「違うんか」

と、まるで高志に詰め寄るかのように言った。
すると、高志は眼を大きく見開き、
「お前は何が言いたいんや？」
と、おどおどしたような表情を浮かべては言った。
その高志の表情を見ると、今や高志の命運は恵子の一存に翻弄されてるかのようであった。
すると、恵子は、
「今、警察はその女の事件を必死で捜査しとるんや。
で、容疑者として、あたしも訊問を受けたし、また、警察は高志さんのことも疑っとるぜ。しかし、証拠がないから、あたしも高志さんも逮捕されんのや。
しかし、あたしが持っとる動画を警察に見せ、あたしが証言したらどうなると思う？」
「.....」
「そうなると、高志さんは警察に逮捕されるんやないかな。あんたは、女殺しの疑いで逮捕されるんや！　それは、間違いないぜ！」
と、恵子は興奮気味に言った。
すると、高志は小刻みに震え、また、歯をがちがちと鳴らした。それは、あたかも逮捕されるということに対する恐怖に震えてるかのようであった。
そんな高志に、恵子は、
「そう思わんか」
と、問いかけた。
しかし、高志はその恵子の問いに、言葉を発そうとはしなかった。それは、まるで何をしてよいのか分からない子供が放心状態にあるかのようだった。
高志が何も言おうとはしないので、恵子は再び、
「そう思わんか」
と、まるで勝ち誇ったかのように言った。その恵子の様は、まるでこれからの高志の人生は、恵子の一存でどうにでもなるという勝利感に満ちたものであった。
すると、高志は、
「お前、その動画をどうするつもりや」
と、いかにも不安そうな面持ちを浮かべては言った。
「そりゃ、まだ決めとらん。だから、高志さんに相談しとるやんか」
と、恵子は淡々とした口調で言った。
すると、高志はいかにも穏やかな笑みを浮かべては、
「やっぱり、その動画を俺に見せてくれんかな」
と、いかにも恵子に哀願するかのように言った。
「そりゃ、駄目やと言ったやないか。そんなことをしたら、あんたは壊すに決まっとるからな」
と、恵子は唇を歪めた。
「そんなことやらへんからさ。なぁ、頼むから、俺の言うことを聞いてくれへんかな。お前は俺の許嫁やないか」
と、高志は再び恵子に哀願するかのように言った。

　その高志の言葉を聞いて、恵子は眼を大きく見開き、嬉しそうな表情を浮かべては、
「あたしが、あんたの許嫁というのは、間違いないんか？」
「間違いないに決まっとるやないか。最初からそうやったやないか。何で俺が、お前との約束を破らなあかんのか」
　と、高志は恵子を見やっては、いかにも嬉しそうな表情を浮かべては言った。
　すると、恵子は、
「嬉しい！」
　と、声高に言った。そして、
「じゃ、高志さんは大学を卒業すれば、この島に戻って来るんやな？」
「当り前やないか。俺は最初からそう思っとたんや。何で俺が恵子ちゃんとの約束を破らなあかんのか」
　と、高志は毅然とした表情を浮かべては言った。
「嬉しい！　　あたし、てっきり、高志さんが東京に染まり、もう島に戻って来やへんのかと思とったんや。そればかり心配しとったんや」
と、恵子は胸の痞えを吐き出すかのように言った。
「それは、要らぬ心配やで。俺はそんなこと、思ってないがな」
　と、高志は人良さそうな笑みを浮かべては言った。
「嬉しい！　　やっぱり、高志さんはあたしのものだったんや！」
　恵子は嬌声を上げ、高志の胸の中に飛び込んで来た。
　そんな恵子を高志は全身で受け止めた。そして、恵子の身体を直に感じ取った。
　花田香織の身体からは、香水の匂いが感じられたが、恵子の身体からは、海の臭いが感じられた。それは、幼少時から恵子の身体に染み付き、決して恵子の身体から離れることのない体臭のようであった。
　恵子は嬉しさの為か、何も言わずに高志の身体を抱き締め続けた。
　そんな恵子の乳房に高志はそっと高志の掌を置いた。
　恵子の乳房に触れるのは久し振りであった。また、それは確かに揉み心地は良かった。恵子の乳房はとても大きく弾力性があったのだ。
　高志の行為に、恵子は、
「ああ.....」
　と、妖艶な呻き声を漏らした。
　そんな恵子に、高志は、
「明日も会ってくれんかな」
　と、恵子の耳元で囁くかのように言った。
「明日も会ってくれるんか」
　恵子は高志の言葉に、嬉しそうな表情と口調で言った。
「ああ。この島にいる時は、毎日でも会いたいぜ」
　と、高志は口元に笑みを浮かべては言った。
「嬉しい！」
　恵子は嬌声を上げた。
　そんな恵子に、高志は真顔を浮かべては、

「で、会うんやったら、暗くなってからがええんや」
「暗くなってから？　何で暗くなってからがええんや？」
　恵子は甘えるように言った。
「そりゃ、その方がええことを出来るからや。昼間なら、人目があるやんか」
　と、高志は些か照れ臭そうに言った。
　すると、恵子は、
「それもそうやな」
　と、些か顔を赤らめては言った。
「そうか。じゃ、明日は久し振りにやろうか。で、場所は監的哨や」
「監的哨か。そりゃ、ええ場所や。監的哨なら、暗くなれば誰も来えへんからな」
　と、恵子は妙に自信有りげな表情口調で言った。
「じゃ、六時や。明日の夜の六時に監的哨で会おうや。真っ暗になれば、恵子ちゃんの顔が見えなくなるからな」
「それでええわ。で、今日はこれで終わりか？」
　恵子は些か不満そうに言った。高志の行為が、恵子の乳房を恵子のシャツの上から揉むという行為以上に進展しなかったからだ。恵子はそれが不満だったのだ。
「ああ。そうや。スキン、持って来やへんだからな」
　と、高志は面映ゆそうに言った。
「そうか。それはあかんな」
　と、恵子も面映ゆそうに言った。
「で、恵子ちゃんに少し頼みがあるんや」
　高志はいかにも畏まったような表情を浮かべては言った。
「頼み？　それ、何や？」
　恵子は眉を顰めては言った。
「俺があの女を岩で殴った場面が映った動画があるとのことだが、それはＳＤカードに録画されとるんか？」
「ああ。そうや」
「実はな。言いにくいことなんやが、恵子ちゃんが撮ったというそのＳＤカードを持って来て欲しいんや」
　と、高志は些か顔を赤らめては言いにくそうに言った。
　すると、恵子は渋面顔を浮かべた。そして、
「何でや？　何でそんなんこと、言うんや」
　と、いかにも怪訝そうな表情を浮かべては言った。
「何でって、そりゃ、気になるやんか。俺が女を殴った場面が映っている映像があるなんて。それがどんなものなのか、少し見てみたいんや。
　それに、もう一つ頼みがあるんや」
　と、高志は恵子をまじまじと見やっては、まるで哀願するかのように言った。
「何や、もう一つの頼みって？」
　恵子は渋面顔のまま言った。恵子は、正に高志のその頼みというものが、いかなるものなのか、てんで推測出来ないかのようであった。

「俺が女を殴ったということを誰にも言わんで欲しいんや。恵子ちゃんさえ黙ってくれれば、誰にも分からんからな」
　と、高志は口元に笑みを浮かべてはいたが、いかにも決まり悪そうだった。
　そんな高志を見て、恵子は薄らと笑みを浮かべては、
「そりゃ、誰にも言わんよ。あたしの旦那となる人が、警察に捕まるなんて、嫌やないか。だから、あたしはあたしが眼にしたことは誰にも話すつもりはあらんへんぜ」
　と、それは当然だと言わんばかりに言った。
「そうか。それを聞いて安心したわ。
　で、その場面が映った映像はちゃんと見せてくれるんやろな」
　と、高志は薄らと笑みを浮かべて言ったが、その高志の表情を具に見ると、それは正に真剣そのものであった。
「そりゃ、見せてもええけど、壊さないんやろな」
「そりゃ、当り前やんか」
　高志は毅然とした表情で、声高に言った。そして、
「じゃ、明日の夜の六時に会うことにしようぜ。明日の六時が待ち遠しいな。
　で、明日の六時に、俺と会うということは、誰にも言わんでもらいたいんや」
　と、些か顔を赤らめては言った。
「何でや？」
　と、恵子は眉を顰めた。
「そりゃ、その時間に会うとなれば、やりに行くと決まっとるやんか。そう思われるのは、嫌やないか」
　高志は恵子から眼を逸らせては、些か顔を赤らめては言った。
　そう高志が言うと、恵子は笑みを浮かべては、
「それもそうやな」
　と、些か照れ臭そうに言った。
　そして、二人は程なく抱き合った。
　その抱擁は少し間続いたが、やがて二人は暗闇に包まれた八代神社の石段を一歩一歩慎重な足取りで下りて行ったのであった。

大勝負

六章　　大勝負

　翌日の午後四時頃から雨となった。午後三時頃は、今にも雨が降りそうな曇り空だったのだが、遂に持ちこたえることが出来ずに、雨が降り出したのだった。
　高志も恵子も、「雨の中を何処に行くんや？」と母親から訊かれたが、「ちょっと散歩に行くだけや」と、軽く返答しただけで済ませた。いくら二人の関係が将来の伴侶であったといえども、まさか、「やりに行くんや」とは、言えないというものであろう。
　豪雨ではなかったといえども、監的哨に向かう山道を歩く時に、泥水が高志のズボンに跳ね上がったりすることは、避けることは出来なかった。恵子の場合も然りだった。
　監的哨に先に着いたのは、恵子の方であった。恵子は監的哨の中に入ると、持ち合わせて来た手拭いで、直ちに恵子の素肌を拭った。しかし、シャツに染み付いた雨雫から逃れるには、素っ裸になるしかなかった。
　恵子はその時、腕時計を見た。すると、丁度、午後六時だった。
　恵子に五分遅れて人の気配がしたかと思うと、それはやはり高志であった。
　高志は恵子の姿を確認すると、
「待ったかい？」
　と言っては、白い歯を見せた。
「いいや。そんなに待たへんだよ。五分位前に着いたばかりや」
　と言っては、恵子も白い歯を見せた。
「そうか。それはよかった。しかし、雨が降ってしもうた」
　と、高志は恨めしそうな表情を見せては言った。
「でも、雨の方が良かったんやないかな」
　と言っては、恵子は微笑を浮かべた。
「何でや？　　何で雨の方が良かったんや？」
　高志は怪訝そうな表情を見せては言った。
「雨の方が二人きりになれるからや。こんな雨の中にここに来る人なんて絶対におらへんからな。雨が降ってなければ、誰かが来るかもしれへんからな」
　と言っては、恵子は微かに笑った。
「それもそうやな」
　と言っては、高志も微かに笑い、白い歯を見せた。そして、恵子を見やっては、
「まるで、俺たち、新治と初江みたいやな。新治と初江とは、三島由紀夫の小説の新治と初江のことや。新治と初江は、雨に濡れた身体で監的哨の中におったやないか」

と、高志は声高に言った。
「その新治と初江か。しかし、新治と初江が監的哨の中におったのは、昼間で、新治が先に来ては、薪に火を点けとったんや。今のあたしと高志さんとの状況とでは、大分違うやんか」
と、恵子は微かに笑った。
「そう言われてみれば、そうやな」
と言っては、高志も微かに笑った。
そして、笑みを浮かべたまま、
「で、シャツは濡れたんかな」
高志は改まった様を見せては言った。
「そりゃ、濡れたわ。この雨やからな」
「じゃ、俺が恵子ちゃんの身体を拭いてやろうか」
高志は穏やかな表情と口調で言った。
「そうやな。そうしてくれるか。身体がむずむずして、しゃあないわ」
と、恵子は些か高志に甘えるかのような表情と口調で言った。
そして、さっさっとＴシャツを脱ぐと、そこには栗色のブラジャーをつけただけの恵子の上半身が現われた。
そして、恵子は背中を高志に見せると、
「背中から拭いてくれるか」
と、穏やかな口調で言った。
「分かったよ」
高志は恵子から手拭いを渡されると、早速汗と雨雫で濡れた恵子の背中を拭き始めた。
恵子の背中をただひたすら恵子に奉仕するかのように手拭いを這わせていた高志に、恵子はやがてくるりと向きを変えては、高志に正面を見せた。
すると、恵子のブラジャーと浅黒い素肌をはっきりと眼にすることは出来た。
恵子の上半身に、まるで放心したような表情を浮かべては見入っている高志に対して、恵子は薄らと笑みを見せては、
「さあ、拭いてや」
と、高志に催促するかのように言った。
すると、高志は小さく肯き、そして、高志が手にしていた手拭いを、まず恵子の首の辺りに持って行った。そして、まず首の辺りを拭き、そして、手拭いを徐々に下の方に這わせようとしたのだが、そんな高志に、恵子は、
「ブラジャーを外してよ」
と、甘えるかのような口調で言った。
恵子にそう言われ、高志は少し躊躇った。そして、高志の動きは止まった。
そんな高志に、恵子は、
「あの女と同じようにしてよ」
と、甘えるような仕草で言った。
そう恵子に言われると、高志は言葉を返せなかった。というのは、やはり恵子は高志が監的哨の中で香織のブラジャーを外し、乳房をハンカチで拭いてやったという行為を

盗み見していたということは、事実であったようだからだ。そう思うと、高志は顔を赤らめざるを得なかった。
　しかし、恵子はその高志の行為の全てを盗み見していたのだろうか？　　その点に関しては、高志は何とも言うことは出来なかった。
　それで、高志はもたもたしていたのだが、そんな高志に恵子は、
「早くブラジャーを外してよ。そして、あたしのおっぱいを手拭いで拭いてよ。高志さんは、あの女に対して、そうやったやないか！」
　と、高志のことを威圧するかのように言った。
　それで、高志はまるで主人に命令された子分のように、恵子のブラジャーを外そうとした。
　すると、恵子は素早く高志に背を向け、早くブラジャーを外してよと言わんばかりの様を見せた。
　それで、高志は躊躇わず恵子のブラジャーのホックを外した。
　ブラジャーは勢いよく、恵子の胸からはじけた。
　すると、恵子は素早くブラジャーを外しては手にし、そして、高志の方に向きを変えた。
　すると、恵子の大きな乳房が高志の眼に飛び込んで来た。
　それは、大きなお椀を伏せたような乳房であった。乳首は赤茶色をしていて、あまり綺麗というようなものではなかったが、正にとても大きな乳房で、正に高志が久し振りに眼にした恵子の乳房であった。
　その乳房に高志は手拭いをもって行った。そして、手拭い越しに、恵子の乳房を揉み始めた。
　すると、恵子は、
「あっ……、ああ……」
　と、呻き声を上げ、眼を閉じた。その恵子の表情は、まるで恍惚の表情であった。
　高志はそんな恵子を眼にして、一層恵子の乳房を強く揉みしだいた。その高志の行為は、五分程続いた。
　やがて、恵子は高志の手の動きを封じ、自らの手でズボンを脱ぎ、そして、下着をも脱ぎ捨てた。
　そして、脱ぎ終えたズボンの上に横たわると、高志を眼で催促した。
　そんな恵子に対して、高志は恵子の求めに応じないわけには行かなかった。それで、正に高志は恵子と一年四ヶ月振りの交わりを果たしたのであった。
　行為が終わると、恵子は大いに満足したような表情を浮かべた。そして、
「良かったよ」
　と、まるで高志の労をねぎらうかのように言った。
　そんな恵子に高志は何ら言葉を返さなかったが、顔は笑っていた。その高志の表情を見れば、高志も恵子との交わりに満足してるかのようであった。
　そんな高志を見て、恵子は一層満足したような表情を浮かべては、
「やっぱり、高志さんはあたしの男や。高志さんの身体はあたししか満足させられへんことをよう分かったわ」

と、些か自信有りげな表情と口調で言った。
恵子にそう言われると、
「そうかもしれんな」
と、高志はまるで恵子のその言葉に相槌を打つかのように言った。
「そうに決まっとるやんか。ほら、ぎょうさん、液が入っとるがな」
と言っては、恵子は高志の精液がたっぷりと入ったコンドームを手で掲げては見せた。その恵子の表情は、とても誇らしげであった。
すると、高志は些か面映ゆそうな表情を見せては、
「そんなもの、早く捨ててしまえよ」
と言っては苦笑した。
「そうはいかんぜ。これは大切なものや。あたしが持っとることにするぜ」
恵子はそう言っては、精液が入ったコンドームの先端に輪ゴムを括り付けては、それを恵子が持って来たバッグの中に仕舞おうとした。
この時、高志の脳裏に<今がチャンスだ！>という言葉が走った。高志は高志が香織を殴打したという場面が映ってるというＳＤカードを早く手にしたかったのだ。そして、そのチャンスが今、やって来たと実感したのだ！
「恵子。そのコンドームを只でやるわけには行かんぜ」
と、高志は悪戯っぽい表情を浮かべては言った。
「只でやるわけにはいかん？」
恵子は些か眉を顰めた。恵子にとって、その高志の言葉は思ってもみないものだったのかもしれない。
「ああ。そうや。ＳＤカードや。あの場面が映ってるというＳＤカードと交換や。そのＳＤカードを持って来てくれたやろな？」
高志は悪戯っぽい表情を浮かべては言った。
だが、高志の心の中は、高志の外見とは違って真剣そのものであった。そのＳＤカードを恵子から奪い取る為に、やりたくない恵子とのセックスまでやったのだ。恵子は今や、高志にとって何の魅力も感じさせない無用の長物と成り下がっていたのだ。
また、そのＳＤカードのコピーを恵子は持っていないと高志は確信していた。というのは、恵子は自宅にパソコンを持っていないということを高志は知っていたからだ。パソコンがなければ、ＳＤカードのコピーは出来ないと高志は理解していたのだ。
高志にそう言われると、恵子は、
「そうやったな」
と薄らと笑みを浮かべては、持参して来た茶色のバックの中からＳＤカードを取り出し、高志に渡そうとしたが、その時、恵子は真剣な表情を浮かべては、
「絶対に返してや」
と、高志を見据えては言った。
「そりゃ、分かってるがな。俺は恵子ちゃんとの約束を破らへんぜ」
と、高志はいかにも愛想よい表情を浮かべては言った。
そう高志に言われると、恵子はそれを高志に渡した。
すると、高志はそれをいかにも大切なものを扱うかのように受け取っては、高志のバッ

グに仕舞い込んだ。そして、
「で、やっぱりそのコンドームは今回は捨てようぜ。不衛生だからな。それに、これからもいつだってオレの精液位手に出来るからさ」
　と言っては、高志は決まり悪そうな笑みを浮かべた。すると、恵子も、
「そうやな」
　と言っては微かに笑った。
　そんな恵子から高志は「俺が捨てるから」と言っては恵子から高志の精液が入ったコンドームを受け取ると、
「じゃ、そろそろ行こうか」
　と、恵子に言った。
　すると、恵子は、
「そうやな」
　と言っては腰を上げ、ズボンに付いた土埃をさっと払った。
　高志と恵子は手を繋いでは監的哨を後にし、山道の中を帰途についた。
　恵子は高志に、
「今度はいつ会ってくれるんや」
　と、高志を見やっては言った。
「そうやな。三日後がええな。今日はたっぷりと液を出したから、少し時間を稼がないとな」
　そう高志が言うと、恵子は微かに笑った。そして、
「そりゃ、ええな。じゃ、夜の六時はどうや？」
「夜の六時か。じゃ、もう一回やるつもりか？」
　と、高志が言うと、恵子は、
「そんな恥ずかしいことは訊かんでや」
　と、顔を赤くした。
「それもそうやな」
　と、高志も恵子につられて顔を赤くした。
　そういった遣り取りを交わしながら、高志の表情は徐々に険しくなっていた。というのは、高志の一生をかけた大勝負をする時が後少しというところまで迫っていたからだ。
　監的哨の近くの山道に、海に臨む断崖に接した危険な場所があった。そこには、<危険！　近付くな！>という看板が立てられている位であった。
　とはいうものの、道幅は一メートル位はあったので、普通に歩いていれば、断崖の下に落ちるということはなかった。また、道端には松などが生えていて、それがガードレールの役割を果たしていたので、今までこの辺りで事故が起こったことはなかった。
　しかし、今から人殺しを行なおうとする者が人を断崖の下に突き落とそうとするのなら、それは打ってつけの場所だろう。
　そのことを知っていた高志は、高志が意図していたその場所に来ると、突如、鬼のような形相を浮かべては、恵子の腕を摑み、恵子を断崖下へ突き落そうとした。
「何するんや！」
　恵子は激しい声を出した。

しかし、その声が最後だった。
恵子の身体は高志の馬鹿力を受けて、断崖下へと真っ逆さまに落ちて行った。辺りはかなり暗くなったといえども、高志は恵子が真っ逆さまの恰好で断崖下に落ちて行ったのを眼に出来た。それを確認すると、高志は、「これでよし」と、厳しい表情ではあるが、満足したように肯いた。もはや、恵子を生かしておくことは出来なかったのだ。
高志の運が悪かったといえども、花田香織を死に至らしめたことを知っている恵子の息の根を止めるしかなかったのだ。また、恵子は今の高志にとって正に厄介者に成り下がっていたのだ。
そんな恵子との将来なんて、高志には有り得なかった。もし、恵子と共にこれからも生きなければならないとすれば、それは高志にとって地獄だった。
しかし、そんな恵子から逃れることは出来ない。何故なら、恵子は高志の弱みを握っているからだ。その弱みを恵子が握ってる限り、恵子は高志を恵子の意のままに操るであろう。　それ故、その弱点、即ち、そのＳＤカードと恵子を始末さえすれば、高志は安閑としていられる。そう判断した高志は、どうしても恵子を始末せざるを得なかった。
恵子の死も、証拠さえ残さなければ、花田香織の死と同様、警察から逃れられる。そう理解した高志は、遂にその思いを実行したのだった。
恵子を始末した後、家路についた高志の脳裏は、正にすっからかんだった。ただ、大きな仕事を成し遂げたという充足感だけが、高志の脳裏を支配していたのだった。

帰宅後、高志の両親が寝静まったのをチャンスとばかりに、恵子から手にしたＳＤカードを見てみることにした。
もっとも、高志の実家にはパソコンはなかったので、パソコンで見ることが出来なかった。しかし、デジカメは持っていたので、早速再生してみることにした。その時の高志の表情は、正に真剣そのものであった。
何しろ、そのＳＤカードには、古里の浜で高志が香織の脳天を岩でぶん殴った場面が映ってるという。それが警察の手に渡れば、高志が逮捕されるのは、必至であろう。実際にも、高志は殺すつもりはなかったという不運があったものの、香織を死に至らしめてしまったのだから。
高志はあの時、古里の浜で高志の全く見知らぬ都会的な感じの男と香織がセックスをしてるのを眼にして逆上してしまったのだ。正に香織は高志の女だと逆上せ上がっていたのだ。
それで、香織に、
「お前は、誰とでも寝る女なのか！」
と、罵声を浴びせてしまった。
すると、香織の言葉は、こうであった。
「何を言うの？　この馬鹿者めが！　あたしはあんたという世間離れした田舎染みた男が珍しくて、少しあんたと遊んでやってるだけなのよ！　あんたには、それが分からないの？　全く間抜けな男ね！
でも、あんたとは、これでお別れね！　今後、もうあたしの前に現れないでね！」

高志は香織にそのように言われてしまい、逆上してしまった。そして、傍らに手頃な尖った岩があったのを眼に留めると、素早く手にしては、香織の脳天に一撃を喰らわしてしまったのだ。
すると、香織は呆気なく動かなくなってしまった。高志が揺り動かしても、微動だにしなかったのだ。
そんな香織を眼にすると、高志は怖くなってしまい、逃げるようにその場を後にしたのだった。香織の死を知ったのは、少し時間が経ってからのことであった。
それはともかく、デジカメを見てみると、動画が保存されてたので、とにかく高志は再生を始めた。だが、最初は何も映ってはいなかった。
だが、やがて、鮮明な映像が現れた。しかし、それは、高志が意図していた場面でなかった。何と、恵子の顔が画面いっぱいに現われたのだった。
<高志さん、驚かせて御免な。あたし、高志さんが古里の浜であの女の頭を岩で殴打した場面が映った証拠を持っとると言ったけど、そんなもの、持ってへんぜ。つまり、あたしは高志さんに嘘をついたんや。高志さんを少しからかってやっただけや。悪く思わんでな。
大体、高志さんが花田香織とかいう女の頭を岩で殴るわけないやないか！　高志さんがそんなこと、する筈ないからな。高志さんが花田香織殺しで疑われるというのなら、あたしが証言してやるぜ！　高志さんは殺してないとな！>
と、恵子は微笑を浮かべながら、そのように話していたのだ。
この映像を見て、高志は愕然としてしまった。つまり、高志は恵子を殺す必要など、まるでなかったというわけだ！　恵子は高志が香織を殺した場面が映った証拠を持ってなかったわけだから、正に恵子を殺す必要はなかったのだ！
つまり、高志は恵子の嘘をあっさりと信じてしまい、その結果、恵子を死に至らしめてしまったのだ！　恵子とて、恵子の嘘がまさか自らの死を招くなんて、思ってもみなかったであろう。
しかし、高志は恵子はひょっとして、偽りのＳＤカードを渡したのではないかとも思ってみた。その可能性がないとは、断言は出来ないであろう。つまり、恵子を殺してしまったことは、正に軽率極まりない無謀な行為だったといえるのではないのか？
そう思うと、高志は頭に血が上り、赤面しては、頭の中が空白になりそうであった。正に高志は殺す必要がなかった花田香織と宮田恵子という二人の女性を死に至らしめてしまったのだから。
そう思うと、高志はもうどうすればよいのか、分からなくなってしまった。こうなってしまえば、遺書を遺し、自殺しようか？　それとも、警察に出頭しようか？
まだ、人生経験の浅い高志は、正にどのようにすればよいのか分からず、混乱した頭を一層混乱させるだけであった。

夜が明け朝となった。だが、高志は昨日の出来事が気になり、殆ど眠れなかった。
そんな高志の許に朝から何処かに外出していた花子が、
「ただいま」

と言っては、家に戻って来た。
それで、高志は思わず我に返った。
花子が高志の前に現れると、
「どうしたんや？　顔色、悪いやんか？」
と、開口一番に言った。
花子にそう言われると、高志は笑顔を繕い、
「そんなことないさ」
と言うと、花子は突如、顔を強張らせては、
「えらいことになってしまったぞ」
と、高志をまじまじと見やっては言った。
「えらいこと？　それ、どんなことや？」
高志は眼を大きく見開いては、いかにも興味有りげな表情を見せては言った。
「恵子ちゃんが、大怪我をしてしまったんや」
それを聞いて、高志は思わず絶句してしまった。花子の言葉は、正に高志の想像だにしてなかった言葉であったからだ。
それで、言葉を発することは出来ずに、ただ呆然とした顔を浮かべるだけであった。
そんな高志に、花子は、
「ほら！　監的哨の近くに断崖に面した危険な場所があるやんか。そこから足を滑らせて、海に落ちてしまったんや。しかし、松の枝に引っ掛かって海まで落ちずに済んだんや。それで、命拾いしたんや」
と、興奮しながら、声高に言った。
その花子の言葉を聞いても、高志は言葉を発することは出来なかった。恵子が助かるなんてことは、正に想像すらしてなかったのだ。また、恵子が助かったとなれば、高志がどうすればよいか、それに関しても頭を巡らせたことはなかった。
何しろ、恵子を断崖へと突き落としたのは、高志である。そのことを知らぬ恵子ではない。それ故、恵子の口から高志の行為が明らかになるのは、間違いない。
それだけではない。恵子の口から香織殺しの件も明らかにされるかもしれない。恵子は高志に嘘をつき、香織殺しに関する証拠を持ってる可能性は有り得ることなのだ。
そう思うと、高志は生きた心地はしなかった。
だが、そんな高志の心情を知らない花子は、高志の蒼ざめた表情は、恵子の事故がそのようにさせたのだと理解した。
そんな花子は、
「恵子ちゃんは、右足と左手の骨折という大怪我をしてしまったんや。しかし、命には、別状はなかったそうや。
で、恵子ちゃんは、夜道を歩いとったら、うっかりと足を踏み外してしまったそうや。だから、あの道に策をつけるようにと市長に言わなあかんと、えらい立腹しとったそうや」
と、声を荒げては言った。
確かに、恵子が断崖下へと落ちた場所は危険な場所で、島の少なからずの者が、その危険性を指摘していたのだ。また、恵子もその中の一人だったのだ。

「恵子ちゃんは、夜道を歩いとったら、うっかりと足を踏み外してしまったんか？」
　高志は眼を大きく見開き、いかにも真剣な表情を浮かべては言った。高志は、花子の言葉の真偽を確かめようとしたのだ。
「そうらしいな。詳しいことは知らんけど。さっき、道を歩いとった時に、小林さんと偶然に会ったんや。その時に、小林さんから聞いたんや。
　小林さんによると、恵子ちゃんは今、鳥羽の田中医院にいるそうや。
　お前も早く田中医院に行っては、恵子ちゃんを見舞ってやれよ。お前を見れば、恵子ちゃんは元気が出るんとちゃうかな」
　花子にそう言われ、高志は思わず、
「ああ」
　と言ってしまった。
「そうか。で、いつ見舞いに行く？　　母ちゃんは今から行こうと思っとるが、お前も一緒に行くか？」
　そう花子に言われ、高志は迷った。行くかどうかと。
　恵子が高志が犯した行為を知らぬ筈はない。恵子が高志を眼にしたら、恵子はどんな顔をするだろうか？　　阿修羅のような表情を浮かべては、「人殺し！」と高志のことを罵るだろうか？
　いくら恵子といえども、明確な殺意を持って行なった高志の行為を許す筈はない。恵子と高志との関係は、正に昨夜終止符を打ったのだ。
　そう思うと、高志は恵子と顔を合わすことは出来なかった。
　それで、
「今は行けん」
　と、渋面顔で言った。
「何でや？」
　花子は怪訝そうな表情を浮かべた。
「急にお腹が痛くなってしまったんや。今、何だか身体の調子が悪いんや」
　と、高志はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべては言った。
「そうか。それなら、しゃあないな。じゃ、母さん、一人で行くことにするか」
「そうしてくれるか」
　と、高志は花子から眼を逸らせては力無い声で言った。

　恵子はひょっとして花子に何もかもを話すかもしれない。そうなってしまえば、今度こそ、高志の人生は終止符を打つだろう。正に、時間を元に戻せるのなら、戻したい心境だったが、どうしようもなかった。
　花子が出て行った古びた家の中で一人になった高志は、正に放心したような状態で時の流れに身を任せ続けたのであった。

　それからどれ位時間が経過したのか、高志はよく覚えていなかったが、花子が「ただいま」という声と共に戻って来た。

そして、すぐ高志の許に来ると、
「田中医院に行って来たぜ」
と、冴えない表情を浮かべては言った。
花子にそう言われても、高志は返す言葉はなかった。そして、花子から眼を逸らせては、強張った表情を浮かべていた。花子はもう何もかもを知ってしまったのではないかと、高志は恐れたのだ。
だが、花子はそんな高志の心境とは裏腹、
「恵子ちゃんはやはり、道を歩いていた時にうっかり足を踏み外してしまい、断崖下へと落ちてしまったそうや。恵子ちゃんは『あたしの注意が足らなかったんや』と、大いに反省しとったぜ」
と、高志を見やっては言った。
その花子の言葉は、正に高志にとって意外な言葉だった。恵子はてっきり花子に、「あんたの息子があたしを殺そうとしたんや！」と言ったとばかり思っていたのに、今の花子の言葉からは、その高志の恐れが微塵も感じられなかったからだ。
それで、高志は、
「それ以外、何か言っとたか？」
と、恐る恐る訊いた。
「何でも恵子ちゃんは、一人で監的哨に向かう夜道を歩いとったそうや。何でも気分がすぐれなかったんで、気分転換の為に歩いたそうや。
すると、運悪く足を踏み外したそうや。
しかし、あの辺りは元々危ない道やったから恵子ちゃんは、『早く策をつけてもらわなあかん』と、怒っとったがな」
と、花子は淡々とした口調で言った。
その花子の言葉を聞いて、高志は大きく眼を見開いた。正に、その花子の言葉は、高志の思ってもみない言葉であったからだ。恵子は、正に花子に本当のことを言わなかったのだ。
高志が花子の言葉を耳にしても、渋面顔で何も言おうとはしないので、花子は、
「どうしたんや。さっきから、えらい深刻そうな顔をしとるやないか。恵子ちゃんが無事だったんやから、もっと嬉しそうな顔をせなあかんのとちゃうか」
と、怪訝そうな表情を浮かべては言った。
そう花子に言われると、高志は、
「それもそうやな。確かに母ちゃんの言う通りや」
と、笑顔を繕った。
「で、恵子ちゃんは既に手術を終えとるんやが、右足と左手を骨折したんやから、退院するまでかなり時間が掛かりそうや。だから、お前も一度恵子ちゃんを見舞ってやった方がええんとちゃうかな」
と、花子は神妙な表情を浮かべては言った。
「まだ、お腹が痛いんや。それに、恵子ちゃんは怪我をしとるんやから、一人で安静にさせた方がええんとちゃうかな。
だから、恵子ちゃんがもう少し元気になってから、見舞いに行くことにするよ。その

方が恵子ちゃんも落ち着いて応対出来ると思うよ」
　と、花子を見やっては言った。
「そうか。それもそうやな」
　と、花子は呟くように言った。
　花子がそう言うと、高志は神妙な表情を浮かべては、
「で、恵子ちゃんは俺のことを何か言っとったか？」
　と、さりげなく言った。
「ああ。言っとたぜ」
「どんなことを言っとたんや？」
　高志は再びさりげなく言った。だが、高志の胸は激しく高鳴っていた。
「『心配せんでええから、見舞いに来て』と言っとたぜ」
「『心配せんでええから、見舞いに来て』、か……」
　高志は呟くように言った。高志は、その言葉の意味を深く考えたのだ。
　そして、高志の頭に思い浮かんだのは、恵子は高志のことは誰にも言わんから心配せんでええぞと言ったのではないかということだ。恵子の言葉からは、そう思わざるを得なかったのだ。
「ああ。そうや。母ちゃんには、そう言ったがや」
「それ以外に何か言ったのか？」
「特に言っとらへんだぜ」
「そうか……」
　と言っては、高志は眼を光らせた。
　そんな高志を見て、花子は、
「恵子ちゃんからの伝言でもあったんか？」
「いや。そんなもの、あらへんぜ」

事の終わり

七章　事の終わり

　米川たち、花田香織の事件の捜査陣たちは、今、焦っていた。朝倉高志が最も有力な容疑者だと看做していたものの、逮捕出来るかというと、まだそこまでは決断出来なかったのだ。
　だが、更に捜査を続けると、高志にとって不利な情報を入手出来たので、もう一度、高志から話を聴くことにした。
　米川と中村刑事の姿を見ると、高志は表情を曇らせた。そんな高志は、正に疫病神がやって来たと言わんばかりであった。
　そんな高志に、米川は、
「僕は以前、朝倉さんは、七月二十二日の午後六時頃、古里の浜に行かなかったかと訊いたが、『行かなかった』という返答を受けた。それは間違いないかな」
　と、高志の顔をまじまじと見やっては言った。
「間違いないよ」
　高志は憮然とした表情を浮かべては言った。
　すると、米川は嫌味のあるような表情を浮かべては、
「その朝倉さんの証言が覆されたんだよ」
　そう米川に言われても、高志は表情を変えることなく、
「僕の証言が覆された？　　それ、どういうことなんや？」
　と、いかにも納得が出来ないような表情と口調で言った。
「七月二十二日の午後六時頃、古里の浜近くで朝倉さんの姿を眼にしたという人物がいるんや」
　と言っては、米川はにやっとした。
「だから、それは、僕に似た別人物なんや。よく似た人物はいくらでもいるやんか」
　と、高志は渋面顔を浮かべては言った。
「そうは思わんなあ。六時頃、朝倉さんを大崎荘の近くと古里の浜で眼にしたという人物が現われたんや。その二人は朝倉さんと何ら関係のない人物や。
　にもかかわらず、それを否定するとなれば、朝倉さんに何か疚しい所があるからとちゃうかな」
　と、米川は冷ややかな眼で高志を見据えた。
「そうじゃないよ。その頃、俺は大崎荘や古里の浜になんか行ってないよ」
　と、高志は何故そのことが分からないのかと言わんばかりに言った。

「下手な嘘はつかない方がええんとちゃうかな。我々は朝倉さんを花田香織さん殺しの有力な容疑者と疑ってるんや。アリバイも曖昧やし、また、動機も十分や。
　つまり、朝倉さんは花田さんが他の男とセックスしてる場面を眼にし、裏切られたと思い、かっとしてしまったんや。それで、花田さんの頭を岩で殴りつけてしまったんや。また、花田さんが朝倉さんに何か嫌みを言ったのかもしれんな。
　朝倉さんとしては、殺すつもりはなかったが、結果として、花田さんは死んでしまったんや」
　と、米川は言っては大きく肯いた。そんな米川は、正にそれが事件の真相やと言わんばかりであった。
「だから、それは刑事さんの勝手な推測なんや。それは、正に推測に過ぎず、事実ではないんや！」
　と、高志は顔を赤らめては興奮気味に言った。
　すると、米川はにやっとしては、
「犯人なら、誰でもそう言うやろ。とにかく、一度署に来てもらい、話を聴かせてもらわなあかんな」
　と、些か不満そうな表情を浮かべては言った。

　高志は任意出頭という形ではあるが、いわば強制的に鳥羽署にまで連れて来られ、何度も同じような質問ばかりされた。「七月二十二日の午後六時頃、あんたは古里の浜にいたんやろ」
　それは、まるで拷問とも思えるような訊問であった。何故なら、否定すれば、机を叩かれ、
「本当のことを言え！」と、罵声を浴びせられたからだ。
　これでは、やってもいないことをやったと言ってしまうことにもなりかねない。この拷問と思える訊問に、被疑者は音を上げることも少なからずあるだろう。
　しかし、高志はこの拷問とも思える訊問に耐えた。高志が否定すれば、警察の捜査はこれ以上進めないと思ったからだ。
　だが、その高志の思いに反して米川たちは、高志が自供しなくても、高志を花田香織殺しの疑いで逮捕する腹積もりでいた。状況証拠からも動機からも十分であったからだ。
　だが、三重県警の幹部から、米川たちにもう少し証拠を固めるようにという指示が出た。誤認逮捕という失敗を犯したくなかったからだ。
　それで、高志を一旦、帰宅させることにした。
　鳥羽署を後にした高志の表情は、正に疲労困憊といった様相を呈していた。それは、警察の訊問の激しさを物語っていた。
　高志は今、夜を何処で過ごそうかと考えていた。神島行きの定期船は今日はもう、鳥羽の港を後にすることはない。そうかといって、今から宿を確保する気にもなれない。学生の身分である高志にとって、鳥羽のホテルや旅館は高価過ぎる程の宿泊料だったからだ。
　それ故、高志は定期船の待合室で夜を明かす羽目に陥ってしまったのだ。

　高志は正に今、網の中に追い詰められてしまった魚という状態であった。警察は着々

と捜査を進め、高志にとって不利な証拠を次から次へと入手して来るのだ。
　高志にとって唯一の救いは、高志が香織の頭を岩で殴った場面を恵子が眼にしてなかったと言ったことだった。となれば、誰も高志の決定的な証拠を持ってなかったということだろう。
　だが、高志はそんな恵子を殺そうとしたのだ。
　これは正にとんでもいない過ちだったという結果となったが、恵子はそのことをいずれ誰かに話すかもしれない。
　そう思うと、高志は一層落ち込んだ気分に陥ってしまった。
　だが、恵子はどうしてここまで高志のことを庇うのだろうか？　　高志が香織を殺した場面を実際にも見てたのかもしれないし、また、　高志が恵子を殺そうとしたことを警察に話さなかった。いくら高志のことを思ってるといえども、ここまで高志に献身的になれるものだろうか？
　そういった思いが高志の脳裏を去来したが、疲れていたということもあり、いつの間にやら眠りに陥ってしまった。

　高志が家に戻ると、高志を待っていたのは、花子だった。そんな花子の表情は、とても沈み込んでるように見受けられた。まるで、悲愴感が漂ってるようであった。
　高志はその理由を、高志が警察に任意出頭の要請を受けたからだと思っていたが、そうではなかった。
「大変なことになってしもうた.....」
　と花子は言っては、目頭をハンカチで押さえた。
「どうしたって言うんや？」
　花子の言葉の意味が分からなかった高志は、怪訝そうな表情を浮かべては言った。
「恵子ちゃんが.....、恵子ちゃんが自殺してしまったんや.....」
　花子は悲愴感漂う表情を浮かべては、いかにも力無い声で言った。
　花子の言葉を聞いて、高志は茫然自失とした表情を浮かべては、言葉を発することが出来なかった。それは、正に思ってもみなかった花子の言葉であったからだ。
　そして、二人の間でしばらくの間、沈黙の時間が流れたが、やがて、高志は、
「何で恵子ちゃんは自殺したんや？」
　と、花子を見やっては言った。
「遺書があってな。その遺書には信じられへんことが書いてあったんや」
　と、花子は神妙な表情を浮かべては言った。
「信じられへんこと？　　それ、どういったことや？」
　高志は茫然自失の表情を浮かべたまま言った。
「花田香織という東京の娘が殺された事件があったやないか。
　で、その花田さんを殺したのは、恵子ちゃんだと書いてあったんや。そして、その良心の呵責の為に自殺したみたいなんや。
　で、先日、監的哨近くの道で恵子ちゃんはうっかり足を踏み外し断崖に落ちたと恵子ちゃんは言っとたけど、それは嘘で、実は自殺しようとしたんやけど、うまく行かなかっ

ただけやと、恵子ちゃんは遺書に書いとったんや。そして、今度は病院で浴衣の紐を首に巻き風呂場で首を吊って自殺してしまったんや.....」
　と言っては、花子は啜り泣きした。
　その花子の言葉を聞いて、信じられないといった表情を浮かべたのは、高志であった。恵子の遺書の中身は、明らかに嘘であるということを高志は知っていたからだ。
　そして、二人の間で再び沈黙の時間が流れたが、やがて、花子が、
「何でも恵子ちゃんは花田香織という女性に嫉妬したそうや。お前と花田さんが仲良うしとるのを見て、我慢出来ずに殺してしまったそうや」
　と言っては、高志に冷ややかな眼差しを投げた。その花子の表情は、正に恵子が自殺したのは、高志の所為やと言わんばかりであった。
　そんな花子の視線を受けて、高志は言葉を発することが出来なかったが、そんな高志に花子は、
「遺書にはお前のことも書いてあったぜ」
　と、高志をまじまじと見やっては言った。
　すると、高志は重い腰を上げた病人のように、
「何と書いてあったんや？」
「『あたしのことを忘れないで。高志さんのことを本当に好きなのは、あたしだけやで』と書いてあったがな」
　と花子は言っては、唇を噛み締めた。
「あたしのことを忘れないで。高志さんのことを本当に好きなのは、あたしだけやで」という言葉を高志は、何度も心の中で繰り返した。
　恵子は正に高志の罪を被って死んだのだ。花田香織殺しという高志が負わなければならない罪を被って自らで命を絶ったのだ。また、高志の恵子殺しの罪も闇に葬ったのだ。
　高志がそう思ってる時に、
「私が悪いんや」
　と、花子は項垂れたような表情を浮かべては言った。
「母さんが悪い？　　それ、どういうことなんや？」
　高志は納得が出来ないような表情を浮かべては言った。
「私がお前が花田香織さん殺しの疑いで警察に連れて行かれたと、昨夜恵子ちゃんに話したんや。すると、恵子ちゃん、とても深刻そうにしてしまったんや」
　と言っては、花子は項垂れた。
「しかし、何故それが母さんが悪いんや？」
　高志は些か納得が出来ないような表情を浮かべては言った。
「だから、恵子ちゃんはお前を庇ったんやないかと、母ちゃんは思っとるんや。つまり、恵子ちゃんが花田さんを殺したと自供すれば、お前は助かるからな。何しろ、警察は恵子ちゃんも疑っとったから、恵子ちゃんが花田さんを殺したという遺書を遺せば、お前が助かると思ったんやないかな」
「.....」
「つまり、恵子ちゃんは恵子ちゃんの命でお前を助けようとしたんや」
　と言っては、花子は冷ややかな眼を高志に向けた。その眼は、正に本当に花田香織を

殺したのは、高志だと思ってるかのようであった。
　高志はそう思うと、いたたまれなくなり、花子が「何処に行くんや」という声を振り払い、戸外に出た。そして、何処に行くのかという当てもなく、走り出した。
　気がつくと、高志は古里の浜の前で佇んでいた。過失であるにせよ、香織を死に至らしめてしまった場所だ。
　ただ単に、東京に出て、この島の空気を肌から振り払いたいと思い、この島から飛び出してしまった。その結果、二人の人間を死に至らしめてしまった。高志さへ東京に出なければ、花田香織も宮田恵子も死に至ることはなかったのだ！　何もかも、自分の所為だ！　恵子、済まない！
　心の中でそう叫んでみても、もはやどうすることも出来ない。恵子も香織も、もはや息を吹き返すことはなかったのだ。
　高志は今、自らの愚かさを嘆いていた。香織を自らの女と錯覚した為に香織を死に至らしめてしまった。また、恵子こそ、本当に高志を愛していたことに気づかずに恵子をも死に至らしめてしまった。こんな自分がこれからも胸を張って生きて行く権利があるだろうか？
　そう思うと、高志は今、この場で死を選ぼうかと思った。そう決意し、海の中に入って行った。
　そして、やがて、胸の辺りにまで達したのだが、その時、微かではあるが、恵子の声が聞こえたような気がした。その恵子の声は「死なないで！　あたしの分まで生きるんや！」　そのような声であった。
　そうだ！　恵子は高志の罪を被って死んだのだ。
　今、この場で死を選ぶことは、決してむずかしくはない。しかし、それでは、恵子の意を裏切ることになるのではないのか？　恵子の死を無駄にしてはいけない！
　そう思うと、高志は引き返し、膝位の深さの所まで来ると、放心したような表情を浮かべては、海の中に座り込んだ。そして、しばらくすると、やがて、自らの罪を闇に葬り、恵子の分まで生きなければならないという思いが沸き上がって来た。今や、恵子は高志の魂に棲みついた化身なのだ！
　高志はそう思うと、恵子の意を決して無駄にしてはならないと、強く心に刻んだのであった。

　一方、恵子の遺書を眼にした米川たち捜査陣は、渋面顔を浮かべては何度も首をかしげていた。米川たちは、花田香織を殺したのは、朝倉高志に違いないと看做していたからだ。それなのに、恵子が犯人だという遺書を遺し、恵子は自らで命を絶ってしまったのだ。
「正に意外な結果となってしまった」
　中村刑事は呟くように言った。
「ああ。正に意外やったな」
　と、米川も呟くように言った。
「僕は宮田恵子さんか朝倉高志さんのどちらかが犯人と思っとた。確率は五分五分位やっ

たな。もし、朝倉さんが七月二十二日の午後六時頃、古里の浜で眼にされてなかったのなら、宮田さんだろうと思っとたけど、結局は宮田さんやったというわけや」
　と、中村刑事は些か納得が出来ないように言った。
「つまり、末吉さんが朝倉さんを眼にしたという証言は役に立たなかったというわけや」
　そう米川に言われると、中村刑事は少しの間、言葉を詰まらせたが、やがて、
「でも、こういう風に思えんかな」
「どういう風にや？」
　米川は興味有りげに言った。
「つまり、朝倉さんは宮田さんが花田さんの頭を岩で殴った場面を眼にしたんや。朝倉さんは宮田さんが花田さんを殺した場面を見てしまったんやけど、その頃、古里の浜にいたと言えば、宮田さんの犯行にも言及しなければならなくなってしまうかもしれない。それを恐れた朝倉さんは、頑なに古里の浜にいたことを認めようとはしなかったんや。つまり、宮田さんを庇ったというわけや」
　そう中村刑事に言われると、米川は、
「なるほど」
　と言っては小さく肯いた。中村刑事の推理は充分に現実味があると思ったのだ。
「それに、宮田さんは二度も自殺しようとしたんや。一回目は失敗に終わったが、遺書にも書いてあったように、宮田さんは良心の呵責に耐えられなくなったんや」
　そう中村刑事に言われると、米川は、
「そうかもしれんな」
　と言っては小さく肯いた。要するに、それが事件の真相だと思ったというわけだ。

　どうやら、花田香織の事件は宮田恵子が犯人で終結しそうになった。恵子の死と遺書が事件の真相を決したようであった。

　それから一ヵ月が経過した。
　その頃にはもう高志の前には警察は現れなくなった。そのことからして、高志はどうやら捜査の網をくぐり抜けたようだ。
　その頃、高志は伊勢湾を見下ろす小高い丘の上に造られた恵子の墓の前にやって来た。
　そして、墓の前に跪いては、「恵子ちゃん、済まなかった.....」と、小さな声で言っては頭を下げた。
　だが、その高志の言葉に恵子が答えることはなかった。
　だが、墓の傍らには真っ白なハマユウが咲いていた。そのハマユウはまるで笑ってるかのように見えた。それはまるで恵子の笑いのように高志には見えた。その時、高志の脳裏には「志摩の女」という言葉が自ずから浮かんで来た。恵子こそ、志摩の女と呼ぶに相応しい女性だったのかもしれない。

<終わり>

この作品はフィクションであり、実在する人物、団体等とは全く関係ありません。また、風景、建造物、風習等が実況とはある程度異なってる描写が含まれてることをご了解ください。

志摩の女

著　　広田弦一

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社